

---

# クーゲルシュライバー！

織部鶴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クーゲルシュライバー！

### 【NZコード】

NZ682N

### 【作者名】

織部鶴

### 【あらすじ】

「これ……美靴のニーソックスだろ」

落ちていたニーソックスを拾つたちょっと強烈な匂いフェチ男子”常葉 出水”は、それを落としたと主張する見覚えのない女子生徒に向かつて言つ。動搖する彼女は会話の果てに告白した。

「わ、わたし……彼女の事が本気で好きなのーー！」

男の人格を持ち合わせる彼女”綿峰 ちこり”は、同級生の女子に本気の恋をしてしまっていた！

友達の伝手や因果で手伝う事になってしまった出水は、ターゲットを部活動に取り込むために挑戦した事もないライトノベルを書く事になる。しかしそれをちこりに提案した途端、彼女の顔色は一気に怪しくなってしまい……

青春振投げ捨てラノベ書く？ クーゲルシュライバー！ 始まります

## プロローグ

プロローグ

> i 3 6 8 1 5 — 2 8 8 3 <

「それだけは……絶対に嫌だつ……！」

教室というには設備がお粗末な旧校舎の一室で、突然彼女は机を叩いて立ち上がった。

「ラノベなんか……臭くて、ダサくて、欲望だけは一人前のキモ才タが読むものだつての……。それを作つたりしてゐる奴らなんかは、碌でもない妄想をトレンドだと言いたげに「ゴミを量産し続ける……」。そんな職を目指す奴に至つては、何も出来ないクズのクセに、小学生以下の文才で「ゴミを他人に送りつけ、その程度で人の上に立つ事を妄想しているんだ……！」

『綿峰ちこり』は背中の中程まで伸びた髪をブワッと逆立たせ、怒りに歯を軋ませながら唸つてゐる。まるで人が変わつたようだつた。

「あ、落ち着けつてちこー！」

そんな彼女の変貌に驚きつつ声を掛けてみると  
「つさい出水……！」

張り上げられた怒声に、情けないながらも怖気づいてしまう。初めて会つてからそれほど時間は経つてないが、俺の知る限りちこりはこんな口調で話すような子ではなかつた。もつと大人しいどころか、むしろ控えめ過ぎるとすら言える子だつた。

「あれれ……何かこみみ、聞き逃しちゃいけないような言葉が聞こえたなあ……」

部屋の中央に四つの机と椅子が寄せられている中、一人だけロー

ラー付きの回転椅子に座っていたツインテールの少女、《猫井》こみみが不穏な声を口にする。彼女が椅子から降りると、その様子を鋭い目つきで見ていたちこりが顎を引いた。

そして、野良の子猫でも見ているかのような口調で言つてしまつたのだ。

「……小っさ」

プチン、と何かが干切れた様な感覚が俺のところにも伝わってきた。

「ああん！？ 今こみみのブチ切れランギングを1・2ファイニッショシやがったなこんにゃろ！？ ラノベをバカにするのは単に良さが分かつてないだけだろうけどね！ 今！ こみみが小さいってのは！？ 関係ないでしちゃが つ――！」

こみみは使つていた回転椅子の上にサッと飛び上がってから、内部にある支柱スプリングの力を利用してちこりに飛び掛かろうとする。

「ん、にあつ！？」

しかしここにも聞えていないローラー付きの椅子を蹴つて飛び上がり、椅子だけが滑つてその場に落ちるのは誰でも判るはずだった。顎から落ちはさぞ痛いだろう。こみみはまさにその恰好で、床に打ち付けた顎をさすりながら田じりに涙を浮かべていた。

「ぎぎぎい……」

「……なんだよメスネコ」

今にも取つ組み合いが始まれば緊張していた。とても收拾が付きそうにない。

俺はどうすれば良いかひたすら考えあぐねていた。今二人の間に入つても、出来る事なんてたかが知れている。油を注いでどばっちりを喰らうのはもつと勘弁して欲しい。

しかし俺は一人じゃなかつた。机の向かいには、同じようにどうすれば良いのか悩んでいそうな表情をしている女子が座つていた。

「ち……ちょっと2人とも、ここには何のために来たのよ……ちこ

も急にどうしたっていうの？」

彼女は意を決したのか、一度唾を飲んでからこう着しかけている二人に声を掛けた。

「ちつ……黙つてろ五木。今お前には関係のない話だからちこりはまったく顔に合わない声色と言葉で、場を収めようとしたりは威圧した。

「な、なんですっ！……て、いやいや落ち着け私……」

黒髪をポニー・テールにまとめ上げた彼女『五木<sup>いつき</sup> 一枝<sup>かずえ</sup>』は、頭を小刻みに振るつて心を落ち着けようとしていた。一枝は入学以来、同じクラスである為か、ずっとちこりとの友人関係があつたらしい。それなら、彼女の豹変ぶりについて知っているかどうかはともかく、この場を収めてもらうには一枝の力を借りるしかなかつた。

「と、とにかく、ちこは落ち着いて。こみみも理由ぐらいは聞いてあげようよ」

あくまで落ち着いた態度を示しながら一人を落ち着けようとするとが、当人達は一切一枝に振り向きもせず睨み合つ。

「あんたのお願いを叶えてあげるために集まってるんだよ！ 見損なつたよバカちこ！ バカちこ！！」

「ギヤー・ギヤー・ギヤー・ギヤーとうるせーなメスネコ……！ 僕はな、単にラノベを馬鹿にしたいんじゃねえ。俺の経験を以つて言つてるんだよ！ その辺のレビューと一緒に語んじやねー！」

「だあかあルア……人の話聞けってんのよゴルアアア……！」

いつのまに淑女な態度はどこへやら、一枝はその存在を流された末に、濁流の中へ飲み込まれてしまつたようだ。まったく笑えない。

それから取つ組み合いのケンカに至るまでは数秒も掛からなかつた。見た目はちゃんと女の子女の子している三人が、耳を塞がずに居られないような雑言を口にしながら、互いのセーラー服を引つ張り合つてゐる。

その混戦の中から飛び出たちこりの一言だけが妙に俺の耳に残る。

「ひひひ……俺に触んな！！」

俺と自称する女子は居ない訳ではない。ただひひひの姿勢・雰囲気には限っては明らかに違和感があった上、今までは”わたし”と弱弱しい声で言っていたはずだ。これはやはり……そういう事なのだろうか？　いや、この際間違い無いはずだ。

「ちょっと待ってくれ」

俺はゆっくりと立ち上がりながらキヤットファイトの猛火立つ場所に近づくと、あえて神妙な声色を意識しながら呼びかけた。すると暴れていた三人は、ピタリと手を止めてこちらの方に向いた。俺自身はその反応を見越してやる程の策士ではなが、しかしながらこのチャンスを逃す訳にはいかなかつた。

「何よ出水」

一枝はジト目で俺を睨む。一瞬で匙を投げてしまつた自分を見てほしくないのか、どこか疎ましさを思わせる眼力を向けてくる。

「……なんのイズミー」

不機嫌一色といった顔をしたこみみは、口を横長に伸ばしながら鼻にかかる声で言つ。

そんな状況下でも確かめる必要があつたのだ。この騒動のトリガーリを引いてしまつた者……綿峰ちこりの正体を。

「ちこ」

「な、何だよ……」

一度肺に残つた全ての空気を吐き出してからちこりに一步近づく。そしてかすかに漂うチェリーフロートっぽい香りを胸いっぱいに吸いこんでから、俺は彼女との体の距離をグッと縮めた。迫りくる俺に対し彼女はとつさに手を構えてきたが、下段のガードは甘かつたよつだ。

「うりや」  
「えつ」

無い

無い　ない、無い無いないッ！

俺は左手を背中に回して体を寄せ、右手をスカートの中へ一思いに手を突っ込んだ。

すぐに触れたのはやけに柔らかく滑らかな布地。おかしい……どれだけ擦つても、ここにあるはずの“棒”が無いのだ。

「あぐつ……！」

息を気管の途中で詰まらせたような声を漏らす彼女。俺はただただ不可解だった。ちこりの唐突な変貌、口調の変化……その原因はこう考えるしかないはずなのに。

「お前……女装した男じやなかつたのか？」

……どこからかカウベルの間抜けな音が聞こえた気がした。

そうだよ、変装した男じやなきやおかしいはずなんだ。初めて俺と会つたときだって、今に至る理由や目的だって、ちこりが女装をした男と考えれば全てつじつまが合ひつい。それを立証するための一番確実な方法を、俺は今、正直に、確実に試しだけだ！！

「ひつ……あう……」

ふと顔を上げると、彼……ではなく彼女の大きな目にじわっと涙が浮かんだ。手をスカートの中に入れる距離なのだから、顔と顔は息遣いが届く間合いだ。少し目を逸らせば、ひくひくと動く鼻の動きまでハツキリ覗える。

俺が“棒”の探索を諦めて手を引くと、ちこりは崩れ落ちるようにしてその場に倒れた。さすがに、いきなり体に触れたらショックなのだろうか。でもちこついてる？ と直接聞くよりはよっぽど健全だし、答える側のデリカシーは守られるし、その上でどつさの嘘をつく事が出来ない。

しかし、何で俺がわざわざ確かめ

「どうばっー！」

たつた1フレーム、俺の視界に四本の鉄パイプが見えた。

椅子の足部分  
次の瞬間、物凄い衝撃が俺の顔面に訪れると共に、意識は肉体の外へと吹き飛ばされてしまった。

……ああ、走馬灯が見える。

> i 3 6 8 1 6 — 2 8 8 3 <

## 綿峰 ちひろの告白

『綿峰 ちひろの告白』

満開に咲く桜の美しさは、春の季節を迎えるにあれば誰であれ感じられる。

ただほとんどの人は、その美しい瞬間でしか桜を見ようとしない。散ってしまった花弁が、雨に打たれ茶色く萎びる風景は、誰も記憶にとどめておこなうとは思わないものだ。

うちの高校の校庭に植えられた200本以上の桜は、全国で見ても尋常じゃない咲き方をする。学校の敷地自体が東京都区内のど真ん中にあるにもかかわらず、今年のピーク時には『地上の雲』と称される桜の空撮写真と、花見をさせると校庭に都民がなだれ込んで来たという出来事がニュースで放映された程だ。

その桜も今となつては見向きもされぬ、もつさりと若緑の葉を纏つた微妙な姿をしている。

落ちて腐った花弁は地面の土と合わさり、ずつしづと重くなっている場所に積み上げられている。正直、気持ちの良い光景ではない。

「……何でだろうなあ、こんな仕事を」

放課後。部活に飛び出す生徒たちをしり目に、俺は竹ぼうきを片手に校舎回りをトボトボ歩いていた。

校舎の隅に寄せられた花弁は、ゴミ袋にまとめて処理場に出さなければならぬ。その役目は必ず誰かがやる事になる訳だが、俺はこの仕事を今まで五日間毎日やらされている。

苛められている訳じゃない。確かにクラスで少し変人扱いをされている節こそ有るが、理由はもつと単純 暇な奴、つまりは部活

動に入つてなければ、生徒として役員を務めている訳でもないからだ。

「ここまで来ると慣れたもんだな。よいしょっと」

この手際はそこらの用務員なんかに負けない、なんて一人で意地を張りながら集められたゴミを袋に詰め、それを校舎の壁を背に積み上げる。ノルマを済ませたらあとはひたすらゴミ置き場へと往復するだけ。時折空を仰ぎたくなる程に退屈な作業だ。

「げつ……ここのは弁、雨水吸つたまま乾いてねーぞ」

乾いた状態なら竹ぼうきを振るうだけで片は付くが、水を吸つているとなると話は変わる。地面にへばりついて簡単に取れない「え、堆積したものに至つては溶け始めた雪の様に重い。

「スコップ先生を持つてくるしかないな。えーとどこかに掃除用具箱なかつたっけ……」

クラス会で押し付けられるようにこの仕事を任された時、担任の男は「学校を覚える機会にもなる生徒会役員になる時も有利だぞ」と励ましの言葉を送つてくれた。クソありがたい配慮だけど、俺が役員になることは事情により無理に等しい。信任投票ですら怪しいレベルだ。

その理由は俺自身にある。

自分にとっては普通の事であるが、他人には受け入れがたい行為と趣向らしい。それでも俺は改める気がないから、正直に生きていくにはこうして肅々と押し付け仕事をこなすしかないのだ。

憎らしい花弁どもを片付ける正義の味<sup>スコップ</sup>方はどこに行つたか。たしか二日前使つた時にはこの辺りにあつたはず……と、まだ慣れない感覚に歯がゆい思いをしながら校舎を壁沿いに歩く。入学したての一年生にはこれだけで十分なストレスだ。

遠目にはコートの中で跳ねたり叫んだりしているハンドボールやテニス部員の姿が見え、後ろの方からは野球部員の不揃いで妙にグルーヴな掛け声が聞こえる。頭上からは吹奏楽部による野太くて艶

のある金管楽器の音が響いていた。まるで青春の一日一秒をこんな事に費やしている俺を離し立てているようだ。それから逃れようとしたのか、あるいは本当にスコップのありかを思い出したのか。どつちとつかぬ歩調で辿りついたのは、校舎の北側に当たる湿った日陰の細道だった。

「そうだそうだ、確かにこの辺に掃除用具箱が」

都の街と学校の敷地を仕切る壁と、四階建ての校舎に挟まれたこの辺りは、一日を通して日が当たらない為に地面がなかなかぬかるんでいる。当然、こんな暗い所に人通りなんて無いに等しい。そんな所でも掃除してしまおうと思つてしまふ俺は、やはり暇人であった。

目的の掃除用具箱を探して心当たりのある所を歩く。他の生徒たちの声は遠ざかり、少し心が落ち着いた気がした。

そのおかげで、俺の能力はかなり鋭くなつていたようだ。

「あれ……つてもしかして」

> i 3 7 0 2 9 — 2 8 8 3 <

気配を感じた俺はとっさに辺りを見渡す。すると、「ケのおかげでぬかるんでいない地面に布っぽい何かが落ちているのを見つけた。やけに縦に長い黒色の生地……普通の人間には一瞬で理解出来ないだろう。

だが俺には解る。その布に染みついた、芳しい匂いを感じ取つたが故に。

「……何でこんな所に二ーソが落ちてるんだ」

布を手に取つてみると確かにそれは二ーソックスだった。ユニクロ製ではない。真っ黒と言うよりは少しだけ紺に近く、かの一枚組490円よりもさらに滑らかな肌触り。だらんとぶら下げるみると、指先や太ももにあたる部分には使用感のあるシワがはつきりと浮かんでいた。

「ほう、なるほど

一人でうんうんと頷いてから肺に残った息を全て吐き出す。

たまらん、正直。

使用済みのニーソックスを拾つて興奮しない男がどこにいるのだろうか。使っていた人間が分からぬなら尚のこと良い。好き勝手に妄想すればこのニーソックスは何にでも昇華できる。

だがそれは一般人の話だ。俺はこの能力を以つて凡人の向こう側、一步先へと踏み出せる。

カサツ、という足音。

「あ、あの！ その……その靴しつ、それは……！」

> i 3 7 0 3 0 - 2 8 8 3 <

どもつた女の子の声が聞こえてふと我に返る。どうやら俺は全神経を右手に持つていてニーソックスへと向けていたらしい。そんな隙を見せていた所に、俺の獲物を横取りに来た女に呼び止められてしまつたらしい。

「……こほん。えつと、何の用？」

「その、靴下というか、ニーソックスなんだけど……」

「ダメだ」

「えつ！ あの、それ、え！？」

ハイエナ対しては毅然とした態度が適切だ。少しでも気を許せばどこを噛まれて獲物を取られるか分かつたものじゃない。

「いやその、それ……私のニーソ……」

そここの言葉に俺は顔を上げ、寄ってきたハイエナ ではなく、面識のない女子生徒の顔をじっと覗きこんだ。

指定のセーラー服に青いリボン、どうやら同じ一年生らしい。威勢の弱い声や態度を現しているような薄緑の髪は背中の中程まで伸び、もみあげは三つ編みで結ばれている。切りそろえられた前髪の下には大きな目が二つ。口の輪郭は波打つており、なんとも分かりやすい慌て方をしていた。

俺はここに至つてようやく閃く。

「もしかして……これ、君の落し物なのか？」

「そ……うん！ そうそつなの！ それ私が、さつき一階からここに落としちゃって……」

「ふーん。でも今はちゃんとハイソックスを両方付けてるじゃないか」

視線を足元へ落とすと、彼女はこの二ーソックスよりも幾分か濃い紺色をしたハイソックスを揃えていた。余分に持っていた二ーソックスを落としかのかもしれないが、かといってこいつが“ハイエナ”であるかどうかの疑いが晴れた訳ではない。

「これはその……えと、わたしの替えなんです、その二ーソは」

「へえ……」

まったく予想通りの回答。いいだろ？ そつと来るなら確かめてやる。

「ちょっと失敬」

「あっ！？」

素早く息を吐き切つてから、俺は手に持っていた二ーソックスを鼻に押し付け、穴の中へと吸い込まんとする勢いで匂いを嗅いだ。目の前の女子生徒は单なる驚きか、それとも生理的嫌悪か、強い反応の声を発したが今の俺には関係ない。

答えはこの布に染み込んでいる。

「この匂い…………ん はツ！？」

鼻腔の粘膜から電流の様なものが走り、全身を駆け巡る。

俺は単純に確かめようとしたのだ。匂いはその人が持つ個人の鍵のような物。この二ーソの匂いを確かめ、彼女の靴下も押借して確かめれば、俺は非礼を詫び二ーソックスを返さなければならない。その鍵を嗅ぎ分ける特殊能力が俺はある。もっともそれは女性の体臭と限られているが……今はそれどころじゃない。

これは感じ取った匂いではなく、言葉で確かめなければならない。

「本当に君の二ーソックスなの？」

「そ、それは…………その…………」

「……この匂い。君が本人でなければ、俺の知る友達のものとしか思えない。もう一年以上会って無いから今何をしているか分からないが……よっぽどないとは思うけど、確かめるために君の名前を教えてくれないか？」

「はえっ！？ う、うう……」

明らかな動搖。俺はその反応を見越していた。

“俺の知る友達”の姿は、今日の前にいる女子生徒とは見た目も雰囲気も違う。俺が中学一年生の時に転校して以来会ってないが、たった一年でここまで身長も顔も変わるはずはない。いくら女性の見た目にはまったく興味がないとはいって、記憶力まで鈍った訳じゃない。

「本当の事を言つてくれないとどうにも出来ないぞ。別に警察や先生へ突き出したりはしないから名前くらいは教えてくれよ」「ち、ちょっと待つて！ 今どこかに突き出されて困るのはどう見てもあなたでしょ！ あああなたから先に名乗つてよ！」

彼女は顔を真っ赤にし、カミカミな口調で吠えてかかる。そろそろ決着のようだ。

「俺は一年A組の常葉 出水、ちょっとした匂い好きだ。どちらかが困るのだといいたいのなら、別に今から職員室に行つても良いんだぞ？ 俺の能力についてはもう一部の生徒や職員たちに知れ渡っている。このニーソの履き主が別にいると証言することも出来るし、信用に足る立証は済んでいる」

「くつ……！」

「ほら、俺は名乗つたぞ。だから急に先生達へ突き出したりはしないから、名前を教えてくれ」

慌てる態度を見る限りどうにもならなさそうなので、一旦落ち着かせるために声の調子を落とす。逃げられでもしたら面倒な事になりかねない。

「わ、わたしは……B組の、綿峰 ちーじ……」

判つてはいたが、その名前は俺の知る友人のものではない。同時

に本当の一ーソックスの持ち主でないという事も確定したが、また別の問題が生まれてしまった。

「あれ？ ジャあ何であいつの一ーソがこんな所に落ちてて、君が拾いに来たんだ？」

「それは……そ、そうです！ みくちゃんが落とした一ーソをわたしが拾いに來たんです！」

「さつきと言つてる事が違つじやないか」

「うつ……！」

完全にボロは出切つた。

だが彼女 ちこりはもう一人の名前を挙げた。その名前はまさ

に……

「 “みくちゃん”って……まさか、澄川 美靴すみかわ みくつの事か？」

「え、何であなたがその名前を？」

一瞬彼女の言つている事が信じられなかつた。俺が転校して以来、彼女の動静は全く耳に入つてこなかつた。ちこりの言つている事が本当なら、しばらく見ていない澄川 美靴本人が、この学校に居るところ事になる。唯一俺の趣向を理解してくれる友達として、気にならない訳がなかつた。

「ちょっとどこに行くんですか！」

身を翻した俺の腕をちこりがとつさに掴んで掛かる。

「何だよ綿峰」

「どこに行くのかつて聞いてるんです！」

「中学の友達とつうか、幼馴染に会いに行くために理由が要るのかよ

よ

「え、幼つ いや今はそうじゃなくて！ ちょっと待つて欲しいんです！」

引っ張る腕にあまり力は入つていなかつたが、必死過ぎる大げさな身振りについ足を止めてしまう。

「安心しろ、この一ーソはちゃんとみくに返すから」

「かか、勘弁してください！」

「おまつ……もしかして」

「一ソックスは返して欲しいのに、持ち主である本人へ渡す事は拒む。つまり事それは

「……黙つて持ち出してきたのか?」

「あああああああっ! あっ! あのー、ちょっとだけ、ちょっとだけさつきのあなたみたいに、みくちゃんの匂いを楽しもうと! それで窓際まで持つてきたら、つい手が滑つて落としちゃって……」

「……」

「なんだお前もだつたのか。その事情だと、確かにみくへ知れたら都合が悪いな」

「というかあなたも勝手に持つていいくつもだつたんでしょう……? だから、今このやり取りは無かつた事にしよ? ね? その方がお互いの為になるし……」

「いいや。女の子同士ながら靴下の匂いを嗅ぐくらい、変人と思われる程度でさほど問題じやないだろ? 僕は命も名譽も青春も賭してこの匂いを求めてこりと言つのに」

「そこアピールするところなのー? でも何だか負けた気がする……じゃなくて! とにかくみくちゃんの所へ行くのは待つて欲しいのー!」

必死過ぎるちこつに再び正面で向き直すと、彼女は掴んでいた腕を放してくれてから視線を地面へ落とした。散々叫んだ挙句落ち込んでいるらしく。

「……で、今は待つても俺はいざれみくに会いに行くべ。同じ学校に居つてのに挨拶もしないのは心地が悪いし」

「ダメなのー!」

「ええ……? 何で今日会つたばかりのお前にそんな命令をされないと」

「だつて……だつてわたしは……」

「おひ、何だ」

「……聞いて、くれる?」

「だから聞いてんじゃん」

「幼馴染ならいろいろ知ってるんだよね？」

「まあな、幼稚園の頃から一緒にだし

「そんなに付託合いで長いな、私が

「当たり前だろ。小学校の時なんかみくがトラブル起じた

代わりに俺が上級生にボコボコにされたくらい後ろに付いて周つて

たくらいだ

「あ、ありがとう… なら私たちやんと言ひね… 」

「ちよおおおおおい待てよオ！！ 今なんか変な事頬みやがらなか

お前とは初対面も聞いていたんだ！」

奄が死ぬつカゞキはー。

ただ無視すればいいはずだったが、この女は続けて言い放ちやがったのだ。

「わたしは……みくちゃんの事が本気で好きなんですかーー。」

## 五木 一枝の憂慮

《五木 一枝の憂慮》

……言つてしまつた、つい勢いで……。

わたしこと綿峰 ちこりの気分は最高に複雑です。

確かにチャンスは手に入りました。けれども、今まで誰にも明かした事のなかつたこの気持ちを、よりによつて拾つたニーソックスを嗅ぐような変態に教えてしまつなんて……。

それは昨日の出来事。わたしはいつもよりも、一年C組にいる大好きな澄川 美靴ちゃんを見るために教室を覗きました。一年生の教室は一階にA、B、Cと並んであるので、B組であるわたしが用無く覗いても別に怪しまれないのです。

女の子同士なのだから普通に会つて友達から始めればいい……と同級生の子は言つのですが、恋人として意識している私にとっては超えられないハードルがありました。

だから、覗きに行つても話しかける訳じゃありません。ただ遠くからその可愛らしい後姿をじつと眺めているだけ。今の私にはこれが精いっぱいで、なおかつそれで満足なのです。

五時間目授業が終わつてから帰りのHRまでの微妙に空いた時間。わたしの席の前に座つているポニー・テールの女の子が、くるりと振り返つてから声を掛けて来ました。

「なーに変な顔してゐるの、ちこ」

「あ、一枝ちゃん」

決して明るくはなく、友達も多くないわたしにわざわざかまつてくれる子。みくちゃんと仲について相談に乗つてくれる頼もしい

人。それが今話しかけてくれた人“五木 一枝”ちゃんです。

「い、いやいやいやなんでもないですよ！」

「ふーん……ちこがはつきり否定するときは絶対何かがあるんだよ

ね。もう一回質問してもいいの？」

「うう……」

この高校に入学してからずっと一人ぼっちだったわたしに、一枝ちゃんは今みたいな調子で話しかけてくれました。ちょっと押し気味だけ決して強引じゃない優しい声。返答に困つたりはするけれど、わたしにとってはそれがちょうど良いみたいです。

「それが、みくちゃんの事なんだけど」

「澄川さんと進展あつたの？」

彼女はわたしが『みくちゃんと友達になりたがっている』と純粋に思ってる。それで間違いはないんだけど、実際はもつと別の次元。恋という普通の感覚を超えたもの。

唯一と言える友達の一枝ちゃんには、女の子が好きと告白して嫌われたくない。変な奴と思われたくないから、あくまで建前を挟んだ上で以前から相談していました。

「進展と言つか……協力してくれる人が増えたの。昨日放課後に……」

「ああそうそう、昨日はごめんね。姿が見えなかつたから私一人で帰つちゃつたけど」

「わ、わたしこそごめんね！ ちょうどその時、協力してくれる人と会つてたから……」

「そりなんだ。で、どんな人なの？」

一枝ちゃんは体をこちらに向けて、まつたく疑いのない目でわたしの顔を覗きこんできます。

……間違つても『みくちゃんの姿を覗きに行つたら教室には誰もいなかつた。でも彼女の机の上に使用済みらしきニーソックスが置いてあつたから、ちゃんと返すつもりで拝借して窓際で匂いを嗅ごうとしたら外に落としちゃつた。それで私と同じ目的でニーソックス

スを拾つた男子がみくちゃんの幼馴染と知つたから、わたしの方から無理矢理協力をお願いした』だなんてし正直に言えるわけがない。言つた日にはもうお嫁に行けない。

「えーと……そ、そう！ 同級生の男子なんだけど、みくちゃんと幼馴染でいろいろ話を知つてゐるみたいなの」

「へー、男の人ね……」

なぜか一枝ちゃんが声のトーンを一つ落とした。何か地雷ふんじやつた？

汗がひよひよと滲むほどに緊張する。どうか変に感づかれないと……。

「何ていう名前の人？ 分かるかもしない」

出水くんにも協力してもらつなら隠し通す事なんてできないし、それよりも一枝ちゃんに嘘ばかり付きたくないかった。たぶん、名前くらいなら大丈夫だよね。変な噂を聞いていたとしても、まず誤解を解くところから始めればきっと一枝ちゃんも受け入れてくれるはず。

「一年A組の常葉 ときわ 出水 いすみくんって人」

その名前を口にした瞬間、何故か周りにいた数人の生徒までもが身を強張らせたような気がしました。そして言葉を向けた一枝ちゃんに至つては、まさたきもしないまま顔を硬直させてる。率直に、銅像になつちゃつたかと思う程動きません。

「か、一枝ちゃん？」

「…………」

ふと右隣にいた女子生徒たちの声が耳に入つてきました。

「やだ、あの変態また何かしたの？」

「最近は静かつて聞いたのにただ潜伏していただけみたいだね……」

言葉に出さないクラスメイト達も一様に不穏な顔色をしていました。正直彼の事は全く知らないから、まるで私だけが取り残されて

いるよ「つな空氣」。

「あの……一枝ちゃん？」

「……う」

「う？」

第六感が体内にビリビリと電流を発生させていたる感覚がしました。次の瞬間、一枝ちゃんはわたしの両肩をとっさに掴んでから大口を開きました。

「うわあああああああああ！」

「なつなな何！？」

「ダメ！ ゼッタイ！」

「え、えつ？」

「あいつだけはダメ！ 絶対に絶対にずえーつたに ああもつやだやだやだ名前を聞くだけで生理不順になりそう……」「どつしたの急に……」

「かこは知らないの？ 常葉 出水の変態さを」

そこに関しては知つていると即答出来るはずでした。ただし建前を考えて

「まあ……確かにちょっと変わつてるとは思つけど」

「ちょっとどじろじやないつて。いい？ あいつは」

「帰りのHRはじめますよ」

一枝ちゃんが何かを説こうとしていた所に、女性の担任がHRのため教室に入つてきました。彼女は一度大きく深呼吸をしてから「また後で」と言って前に向き直します。

わたしは突然の大声に驚いて肩をすぼめた姿勢のまま、黒いアレ”を片手に持つて話す先生の姿を見ていました。

「昨日通知した通り、今日で部活動の新入部員勧誘活動は終わりよ。ただ部活動への入部や新設に関しては何時でも可能だから、その際は代表者と部員を揃えた上で先生に相談してね。それと、よく先生たちに無理を言つ子がいるけど、新設に関しては手続き以外一切手

を貸しませんからね」

ここ《物語高校》は、東京都新宿区にある私立高校。表面的には生徒の数がちょっと多いだけの高校だけど、実際にはもう一つの特徴があります。

「決して意地悪じやないからね。先生たちも忙しいし、少しひいきをしたらこの学校全体に迷惑をかける事となるわ。うちの高校は特にそのバランスに気を使うからね」

それは部活動がいろんな方向に盛んな事。普通の部活動はもちろんあるけど、それ以外にちゃんとした部員と公的な活動目標があるならどんな内容でも部活を新設出来る。部室がもらえるし部費も出る。何か目的のある人にとっては、ものすごく特別なシステムであるとはわたしも思つところです。

「では以上で今日のHRも終わり。みなさんこの後もがんばってください（・・・・・・・・・）」「

先生の挨拶はいつも通りです。

普通だつたら「気を付けて帰つてね」とかだけど、物語高校の生徒はほとんど部活動に入つています。しかも活動を続ける為にみんな必死だから、先生の挨拶はこの場において一番自然なのです。

当然部活をしていない生徒を蔑ろにしている訳じゃないとは思います。でもどこにも所属していない生徒に対しては、やっぱり村八分にされていいるような風潮がある氣はしたのです。

「それで……何の話だつたつけ？」

わたしは特にやりたい事もなかつたから部活動に入らなかつただけだけど、一枝ちゃんは別に用事があるから所属しなかつたと言つてました。そんなわたしたちは村八分同士、自然と一緒に下校するのが習慣になつたのです。

「あーそうだつた……思い出したくなくてちこに言つべき事も忘れてたよ」

それぞれの場所へと走る生徒たちを横目に、わたしと一枝ちゃんは廊下を歩いて生徒玄関に向かっていました。

「えっと……何があったの？」

「あつたも何も はあ……ちこ、身体検査の時に休んでたでしょ 「そりいえばそうだつたかも」

四月の中旬に新入生対象の身体検査を一斉に行つたらしいけど、わたしはその時体調を崩していて、治つた後に一人だけで検査してもらつた。だから正直、あまり記憶に残るような出来事じゃありませんでした。

「その時にあいつがやらかしたのよ。……この際単刀直入に言つわ。

常葉 出水はね、尋常なレベルじやない匂いフェチなの「

……それも知つてゐる

「それだけならまだ許せたわ。でもあいつ、私が教室に置きっぱなしにしだつた下のジャー・ジと、そ……その、替えのパンツを……手に取つたその場で思い切り嗅いだのよ！」

あれー……出水くん以外にそんなような事やりかけた人、昨日見た気がする……。

「信じられないでしょ！ 人の鞄をあさつた所から完全にアウトなのに……いや、今思えばそれだけなら全然許せたわ」

「え？」

「現場に遭遇した私は柄にもなく悲鳴を上げたわ。自分のパンツを思い切り鼻に押し当てる光景を見たら無理もないでしょ わたしだつたら氣絶するかな……。

「それで、叫び声を聞きつけたクラスメイトたちが一斉に戻つてきた。それで全員が出水の方を見るわけ。ここであいつが観念して土下座でもすれば良かつたのに……」

一枝ちゃんはしばらぐの間を置いてから、少し鼻息を荒くしつつ言いました。

「あいつは……あいつは、私のパンツを片手に持つて「これちゃんと洗つたか？ 少し匂いが残つてゐるぞ」……って言ったのよ。それ

も、クラスメイトの男女子がほとんど居合せているような所で……

「何の臆面もなく……！」

「愁傷様としか……いや、さすがにそれは出水くんが悪いです。

「それで一週間の停学。処罰の軽さには納得してないけど、少年院にでも送られたら私の心地が悪いから一応それで納得した。前から女子の衣類を勝手に嗅ぐような異常行動を繰り返していたみたいだけど、それ以来奴は完全に変態扱い。その上でいつも二コ二コしているから気味が悪いわ。ああいう顔なんだろうけど……」

確かに、一枝ちゃんから聞く分には擁護する氣にもなれないとは思つけど……それでも私には、みくちゃんへ近づくために彼の力が必要なのです。

「でもさ、わたしは……」

「いい？ とにかくこは絶対にあいつへ近づかない事！ 同類に見られたら一生澄川さんと友達になれないよ！」

「それなんだけど、出水くんとみくちゃんは中学生の時から仲の良い友達で……」

「いやいやいや、じうせち」と仲良くなりたいが為の出まかせよ。何か証拠でも出したの？」

わたしが勝手にみくちゃんのニーソックスを取った事を、匂いを嗅いだだけで判別した……だなんて言えるわけがない。今はとりあえず話を逸らせるものが

「あ、ちこにずっとちゃん。よっす」

今一番現われちゃいけない様な人が来てしました。

「……どの面さげて私をあだ名呼びぱりしてんのよ出水。そもそもそのあだ名は嫌なのに」

生徒玄関で鉢合わせた出水さんは、まるで友達に話しかけるかのような口調と笑顔で、一枝ちゃんをあだ名で呼びました。さつきまでの話からは少し想像しにくい光景です。

「そう言えばちゅうじ良いことこのへ出へわしたわね出水

「え？ 何か良いことあった？」

「とんでもない……あんた関係で良い事なんて一つもないからね」

「俺はあるけどな。今日もずっとちゅうじ良い匂いだし」

「……まったく反省していないようね。とにかく話は全部ちゅうじから聞いたわ。その上で、今後一切この子には近づかない事。いいわね

？」

「もしかして昨日の事？ うーん……でも俺は頼まれた側だし」

「それはちゅうじがあんたの事について知らなかつただけ！ わかつた

？ じゃあ帰るよちゅうじー！」

「わあちゅうじ待つて一枝ちゃん！」

一枝ちゃんが私の右手を引っ張り、さっさと靴を履いて外に出る  
よつ促します。流されるままの私は下手に反抗も出来ませんでした。

「あれ？ 一枝ちゃん今日はこっちから帰るの？」

「つうん、単純にちゅうじが心配なだけ。何となく予感がするの」

家までの帰り道。私の家は山手線に乗つて2駅先にあるマンンショ  
ン。対して一枝ちゃんは、学校から歩いて10分くらいの場所にあ  
ります。それなのに彼女はわたしの後ろにびつたりついてきます。  
一枝ちゃんが切符買うのを待つたり、いつも車両を待つ所より遠い  
場所から電車に乗つたり、いつも通りに話をしたり。わたしは単純  
に、ちょっとだけ違う下校の風景を楽しんでいただけでした。

目的の駅で降りてから改札を通り、構外へと出ようとしたあたり。  
そこで一枝ちゃんは突然振り返り、呼びかけるような声でこう言い  
ました。

「なあんあんたがついて来てるわけ……？」

そこでわたしはようやく、出水くんが後ろに付けてきた事を知り  
ました。彼は相変わらず細田をアーチ状に、二コ一コとした表情で  
こちらに近づいてきます。

「それ以上近づくな！」

「何だよずっとちやん」

「それはこいつちのセリフよ。ストーカーまでするのなら、今度は本当に警察へ突き出すよ」

「俺の家もこいつちだし」

「はあ？　また言い訳？」

「うちに上がつて確かめても良いよ」

彼は至つて普通に答えています。内心が読めてるって訳じゃないけど、少なくとも疑えるような格好ではありませんでした。

「……はいはい、分かったわ。分かつたら付いてこないで。お願いでから私の……」

「生理が何とか？」

「消えろ！――」

出水くんの家は私のマンションからそう遠くありませんでした。直線の道で、おおよそ50メートルぐらい手前にある小さなアパートが出水くんの家だそうです。

彼はにこやかにさよならの挨拶をしてきたけど、わたしはキリキリと態度が落ち着かない一枝ちゃんを思つて何も返しませんでした。「ちこ」、さつき見た通りあいつの家はすぐ近いわ。ちこのマンションを特定されたり、登下校の時に遭遇しないように気を付けてね

「あ……うん、わかつた」

「じゃあ私は帰るから。……気を付けてね」

「大丈夫だよ、たぶん」

マンションの入り口で、一枝ちゃんはわたしの両手を握りながら目力を交えつつ言いました。

彼女もまた偽りなくわたしを心配してくれている。なまじそれが伝わるだけに、わたしは複雑な気持ちを抱えながらエレベーターの中へ入つて行きました。

## 猫井「こみみの提案

『猫井　こみみの提案』

「……んお、何だこれ」

1年A組の教室。机の中に手を突っ込み授業で使うプリントを探していると、妙に懐かしいものが出でてきた。緑色の罫線が引かれた紙面には書きかけの文字がある。

「反省文、一年A組　常葉　出水……ああこれが」  
もう一度奥の方へ手を伸ばしてみると、まだビニールの封も開かれていらない原稿用紙がゴロゴロ出てきた。

そう言えば一枝の匂いを思わず堪能していた時に、事が大きくなつて謹慎処分を与えられて、その時に書かされたんだつけか。たった2枚の反省文を書くのにずいぶん苦労した事を今でも覚えている。その意味では非常に懲りたから、反省文ってやっぱり意味はあるんだな。

「よつ、出水」

名前を呼ばれ咄嗟に顔を上げる。俺の目の前にいたのは、薄い水色の髪をツインテールに結んだ小柄な女子生徒だった。

「どうしたこみみ」

彼女の名前は猫井　こみみ。同じクラスで唯一俺に話しかけてくる、ある意味頭のネジが一つ飛んだオタク女だ。

「これ私がさつきまで穿いてたパンツ、いる？」

彼女は右手に丸めて持っていた青色の横縞パンツを机に置いた。

「……このお詫びに差し出されると困るんだけど」

「やっぱそういうもの？　見えると判ってるパンチラもそつだけどねえ」

そういう話じゃないし　あー……

俺は自分の性癖に素直すぎるせいなのか社会的に非常に不味い事をしてしまつたらしく、一枝のように女子生徒から近づかれる事はない。俺が見ていなだけで、物語高校の裏サイト辺りでは死ねだの殺すだの言われてるかもしれない。

それでも俺は困らない。不良にとつちめられている訳じゃないから、普段はおとなしくしているだけで良い。

しかし唯一、こみみだけは臆面もなく話しかけてきて、なおかつ毎度の事妙な振りをしてくる。嫌いという訳ではないが調子を狂わされてしまうのだ。

「冷めちゃうよ?」

「ん……じゃあちょっと失敬」

いくら匂い好きの俺だつてモノの選り好み位はする。当然嫌いな女性の匂いだつてある。ただ一枝のように目がくらむほど良い匂いだと、かのような問題に発展するほど我を失う事はある。

「んー……?」

非常にやりすら。今はまだ午前中、授業と授業の合間。他のクラスメイト達はほとんど教室に残つてゐる。そんな状況で、差し出されたパンツを嗅ぐなんて。

「どう、どう?」

「何だこれ……洗剤にしてはキツすぎる匂いしかないし、これ太ももに敷いて温めてただろ」

「すっげーそこまで判るんだ! タスが出水、こじ褒美として今こみみが穿いてるパンツをここで……」

「いやいいよ、俺がいろいろ面倒なことになる

「そんな遠慮せず」

「いいつってんだろ!」

こんな調子で時たま俺を弄りに来る。匂いはともかく、ビームで本気か解らないのが手におえない。

「それにしても何で判つたかなあ。このパンツ、雑誌の付録なんだよ

「今の時代は本にパンツが付いてんのか……？」

「正確にはパンツに本が付いてるような値段だけね。アキバだとねえ、冷やしパンツも売ってるんだよ…」

……頭痛くなってきた。こいつが居ると感覚が狂う。

「そういうやこの前貸した漫画とラノベ読んだ？」

「貸したんじゃなくて押し付けたもんだら。一応暇つぶしに全部読んだけど」「どうだつた！？」

「こみみは目を輝かせながら顔を近づける。俺は少し後ずさりしながら答えようとすると、横耳にざわざわとクラスメイト達のひそひそ声が聞こえた。

「おい……あんまり俺と居ると、変に噂されて良い事ないぞ」「あまりに親しくされてしまつと、逆に俺は責任を感じてしまつ。それでもこみみは二二二口した表情を変えないまま答えた。

「こみみは最初からこみみだし、別に誰だからって態度は変えないからね。たとえオープンオタクでも挨拶さえ出来れば受け入れられるものなんだから。一番ダメなのは「構つてほしくないし…」とか強がつて隠れオタクの方！　ああ言つて見るとイライラするんだよね」

「……そういう人も事情つてもんがあるんだろ、色々」

「その点出水は自分の欲望に素直だから、こみみの中じゃポイント高いよ」

「はいはいそうですか」

それから適当に借りた漫画とかの話をした。以前からそういう趣味がある訳ではなかつたが、家の時間が有り余つている俺にとって、こみみが押し付けてきた書籍の数々はいい暇つぶしなつた。帰つてすることと並べば料理や宿題、臭い妹が汚したものの洗濯、それが終わればゴロゴロしているだけ。読み切れないと思っていた本の束はあつという間に崩れた。

「うんうん、出水は偏つてるけど良い趣味してるよ」

「褒めてるのか貶してるのか……」

「もちろんGの方だよ～。今度は女性向けのも読んでみる?」

「女性向けっておま いや、お前つて……」

「俺はこの時まで重要な事を忘れていた。

「こみみつてそいつ言えば女だった。確かに女性の匂いはあるが、薄いと言うか何と書つか……中和されたような感じがして、その意味では女らしくない。見た目よりも先に匂いで性別を判断する俺からしたら、こいつは重ねて相手にしづらい奴だ。

「こみみがどうしたの?」

「その……うん。お前にしていい質問かどうかは分からぬけど、聞いてくれるか?」

「もしかして、B組のちこりん(・・・)に頼み込まれて他の女の子との仲を取り持つてほしい、って頼まれた事?」

言葉を返す前にまず自分に訊ねてみた。

俺、こいつにその事いった話したつけ?

「ああ、こみみがなんで知ってるかって? そりやあれだよ出水。『小耳こみみにはさんだ』ってやつだよ!」

> i 3 7 3 6 3 — 2 8 8 3 <

童顔にしたり顔つてこうもウザいのか。

「……挟めるほど大きくなつてから言えつての」

「あーんですつてえ!?」

「ぐえつ! 痛い痛い!」

彼女は自分のルックスや振る舞いに自信を持つてるくせに、体が小さい事を指摘するとやけに怒り散らす。今みたいにスイッチが入れば、周りの目を見ずに思い切り俺の頬をつまんで引っ張る。

「悪かったつてば! 一応大事な話なんだ。ちょっと廊下に出てくれ

「ふえ?」

教室を出るときもひそひそ声を向けられていたような感じがしたが、もうこみみと居る時でもいちいち気にしない。厄介さで言つたら彼女の方が断然上だ。

もう数分で授業が始まるとこいつ事もあり、廊下には人影もまばらだった。俺は一度心を落ち着かせてから質問に入る。

「何で俺とちこの事について知つてるのは深追いしない。その代りお前に、女の子として相談に乗つてほしいんだよ」

「もしかしてちこりんとくつつきたいの？」

いちいちはみみの質問に答えていると前に進まないので

「俺が“ちこ”と“みく”の仲を取り持つため協力する事になったのは、多分お前が知つてゐる通りだ。でも俺から何をすれば良いのか正直分からなから…… その、お前だったら、何をしたら仲良くなれるきつかけになると思う?」

「そんなに難しく考える事かなあ。だつて出水と、ターゲットの澄川 美靴ちゃんは幼馴染なんでしょ？ 君が直接、彼女から情報を聞き出してちことこみみに教えれば良いんじゃないの」

「何でお前が勘定に入つてるかは置いといて…… 俺は俺なりに考えたんだよ。みくは昔からフツーの女子で、それは今でも変わつてないと思う。それなのに俺と関係がある事が学校に広まつたら、きっとあいつの迷惑になるに決まってる」

「なるほどー 確かに出水みたいな変態と幼馴染、なんてふれ込みが広まつたら大変かもね」

「……何故かお前に言わるとムカつくな。とにかく俺は、なるべくみくに関わらないようにしつつ協力したいんだ。で、何か案は無いか？」

こみみは少し考えるような格好をしてから短く問い合わせてきた。

「一つだけ確認。出水は幼馴染のみくちゃんに会いたくないの？」

「そ……それは……」

会いたくない訳がない。みくは俺の趣味を理解してくれる数少ない友達の一人だ。普通に会つて、久しぶりと言つて、1年の空白を

埋められたるくらいにどうでもいい話をしたい。でもそれ以上に

彼女へ迷惑はかけたくない。

「じゃあもう一つだけ質問。会いたいには会いたいんだけど、自分からは会えないから、ちこりんに協力するつていう間接的な手段を取つてまでみくちゃんに関わりたいんだ?」

「う……」

「二つの用は本当に二つだけなのだろうか。そう思つてから心を見透かされっこるような気がする。

「出水の考へてる」とは大体わかつた。こみみが何とかしてしんぜよつ

「ほ、本當か!?」

「うん、良い作戦があるよ。ただし条件が一つだけあるの」  
それは? と無言で訊ねる視線を送ると、こみみは先ほどとは違つて見えるしたり顔を浮かばせながら答えた。  
「こみみに質問しないこと、いい?」

## 綿峰 ちこりの挑戦

『綿峰 ちこりの挑戦』

「それではその……よろしくお願ひ、します……」  
「うーんと、こちら……いそ？」

俺は玄関で立ち尽くした。

田の前には綿峰 ちこりが、カーペットに膝を揃えて頭を下げている。まるで新婚夫婦のお出迎え……と連想するのは思考が古いだらうか。とにかくやりづらい。

「それではどうぞ」

ちこりはスチヤツと指先を揃え、通路の奥を指し示す。俺は両手の荷物を一旦置いてから靴を揃え、無駄に足音を立てないよう気を付けつつ後ろについて行つた。

「うおっ……なんだこの豪華仕様は」

マンションそのものの建構えから想像はしていたが、ちこりの部屋 というか家は、予想を遥かに超すレベルで凄かつた。何をどう間違えたら、同じ高校のクラスメイトがこんな豪邸で一人暮らし出来るのか……自分の住んでいるアパートと重ねてみると現実を疑いたくなる。

「とりあえずソファにかけて。紅茶入れるから」

「お、おう……」

言われるままに綺麗な青色が複雑に編み込まれているソファに腰を折る。冬の冷たい便座に腰かける時の様にゆっくりと。

部屋の中心から周りを見渡してみると、尚のこと広さが如実に覗える。南側の窓……と言つよりはガラスで出来た壁というのか。こんな洋画でしか見たことがない。傾き始めた太陽の光が窓からたっぷり入り込むため、灯り無しにも部屋の中はかなり明るい。

「はいどうや」

「さ、さんきゅ」

真っ白いティーカップ。本当に純白なものだから、高いのか安いのか判らない。妙に恐ろしくなって持ち手が震える。

「そそそれで、ちー」

「はい?」

「えと……俺が礼を言つのも変な気がするが、入れてくれてありがとうな」

「いいえこちらこそ。わたしの無理なお願いを聞いてくれたのですし、こちらも精いっぱい協力するのが筋というものですね」

「こみみとの約束が交わされたのはおよそ6時間前。ちこりと美靴の仲を取り持つための作戦は当日中に発動した。その第1弾が今という訳だ。

「それでその……猫井さんが言つ作戦つてどうのなんですか？」

ちこりとこみみは直接の面識こそないらしいが、経緯のおおよそは話してくる。まだ伝えていないのは、今から話す作戦内容だけだ。「難しい事じやない。明日の昼飯になるお弁当を作つて、美靴に食べさせればいいんだ」

「へえ……へえつ!?

ちこりは小首をかしげてから大きく目を見開いた。今の内なら驚くのも無理はない。

「こみみが言つには、相手の心へ踏み入るには食事中が一番りしい。手作り弁当なら効果は倍掛け、友達になるなんて余裕らしい」「でもでも、わたし料理なんてした事ないし……」

「その為に俺がここへ派遣されたんだよ。こみみは身内の手伝いとか言って来れないから、食材とかは俺が全部揃えた。この通り」

そう言いながら肉や野菜がどつさり入った買い物袋をテーブルの上に置く。彼女は袋を覗き込んでから「おー……」と息を漏らし、またソファへと座りなおす。

「出水くんが作ってくれるのです?」

「バカ、俺が作つたら意味ないだる。俺は自分のを作る片手間に、お前の手料理を手伝うだけ。これもこみみの指定だ。日が暮れる前にとつと作りうせ」

「えつ、ええつと……」

俺がだだつ広いキッチンに食材を運んでいる間にも、ちこりはぐずるような声を漏らしながら後に付いてくる。俺はいつ子持ちになつたんだろうか。

「本当に料理した事ないのか?」

「ここのマンション、事前に契約しておけば勝手に食事が届けられる仕組みになつて……」

「のブルジヨアが。

「はあ……でも料理なんて簡単に言えば四則演算さ。余計な事をえしなければ、必要な味や見栄えはちゃんと求まる。深く考えなくていい」

「やうなんだ……」

IHコンロのスイッチを入れた頃にはもう口が暮れていた。

おかしい。まさかと思つて向かいの壁掛け時計を見ると、もう二時を回つていた。

「これはえつと……熱つ！」

「こり触るなつてー IHだからつて表面は熱いに決まつてんだろべルだつた。」

「じめんなさい……」

包丁の持ち方 から教えるなりこんな時間まで掛からなかつたはず。最初に質問されたのは「包丁つて匕首で切るの?」といつら

「もう止めだ。とつあえずリビングに戻れ」

「えつ、でも……」

「いいからほり」「

「いやでも、あつ……！」

ちこりは棒立ちしていたせいか、俺が背中を押した拍子にふらつと立ち姿勢を崩した。

「危ねつ……！」

俺はとっさに腕を背中に回す。それから踏ん張ろつとしたが、タイミングが遅れてそのまま体を持つてかれた。

「うがつ！」

「きやつ」

傾れながら倒れる。床に着くまで数コソンマもない。このまま行けばどうなるかは想像に難くなかった。

危うくちこりが後頭部を床に打ち付けそうになつたところで、俺の腕が衝突を回避させた。……その代り、下敷きになつた肘がものすごく痛い。

「つかえつと……！」

「そそつかしいな。大丈夫か」

一応、本当に大丈夫か確かめるために彼女の顔を見やる。すると大きく見開いた目がうるうると揺れていたのだ。

「わたし……止めたくないです……」

「止めるも何もお前……」

「出水くんがこんなに協力してくれてるのに、中途半端なまま止めたくないんです！」

彼女は芯のある声を張り上げた。

頬をひと筋流れた涙。それは、悔しさを映しているように見えた。

「……何か勘違いしてないか。IHの火傷は普通のコソロよりも危ないから、すぐ休んで冷やさないと不味いんだよ」

「じゃあ……」

「お前こそ最後まで音を上げるなつて事だ。この調子だと昼飯のために夕飯を抜くことになるぞ」

「う……うん！」

どうしようもないから田が離せなかつた。卵焼きを作るのに1パックすべて使い切り、生じみが増え、夜中にゴミ置き場へ行つたついで、コンビニへも買い出しに行つた。追加の費用は全てちこり持ちで揃する事はなかつたが、その代りに時間はあつと言つ間に過ぎていつた。

「…………」

「いつもの布団よりも心地よい感触がした。まだ眠気に淀む瞼を擦り、うつ伏せになつていた上半身を起こす。

「…………カーペットかよ」

朝からどうしようもない敗北感を覚える。これが貧富の差か。とにかく起きないと。その思いだけでのろのろと立ち上がり、テーブルに置いたままだつた俺の携帯がバイブレーションを鳴らしていた。学校の時からずつとマナーモードのままだつたらしく。

「電話……？」　あい、もしもし

『おにいちゃん！？　やつと出た！　今何してるの！？』

「ああ水桜か…………今…………？」屈辱的なシーツの上で寝てた…………

『え、ええ……？　もう、お兄ちゃん帰つてこないから私が安心して寝られなかつたじゃない。お兄ちゃんの匂いがだいぶ薄くなつてるの！　酸欠状態なおお……』

「朝っぱらから猿みたいに騒ぐなよ…………今は7時半か…………俺は家に寄つてから学校行くから、お前は普通に登校しろよ」

「ふうえ…………？　どうしたの出水くん…………」

スマホのスピーカーが音割れする程に妹の声が響いていたせいか、近くのソファで寝ていたちこりまでもが目覚めてしまった。

『はあっ！？　今女の声が聞こえたよー　お母さんその年で脱童貞なんて許しませんからね！…』

「誰がお母さんだアホ！　もう切るぞ」

終話ボタンを押すまで声が鳴り響いていたが、最後まで相手をしていたら本当に遅刻してしまう。

「どうしたの出水くん……？」

「何でもない。うちの親よじりむねこ」のから電話が来ただけだ。ちこもひとつと支度して投稿しようと。あとアレも忘れずに

「……アレって？」

「弁当だろ弁当。お前が作った分はちゃんと包んでおいたから、忘れずに鞄に入れろよ。俺もう行くから」

「うん……」

まだソファから離れられない彼女を横目に、俺は適当に荷物を片付けて出ていく準備をする。並べて置いていた自分の弁当を手に取り、鞄を片手に最後の確認。そして玄関へ向かおうとするといきなりトコと歩いてきたちこに呼び止められた。

「出水くん」

「なに？」

途中で部屋着に着替えていた彼女は、ふわふわとした上着の端をぎゅっと握りながら小さい声で言った。

「……ありがと、付き合つてくれて」

「俺もタダで手伝つた訳じゃないしな。気にするなよ」

「それは……何の意味ですか？」

「俺にも得があるつて事だよ」

学校に遅刻するほど家が離れているならともかく、ちこつのマンションから俺のアパートまでは歩いて3分も掛からない。朝食は無理だろうけど、シャワーを浴びる余裕くらいはある。

「ただいまーーと……」

時刻は7時45分。普段なら妹は部活のためとつ木に家を出でいるはずだった。

「おかえり、お兄ちゃん」

「何やつてんだバカ。とつとと学校行かんが」「そんなことより。昨日お風呂入った？」

「いや……入れなかつたから今からシャワーに」

「入つてない……入つてない……洗つてないんだよね……」

「お、おい。ジリジリと近寄るな」

「にいにいちゃんつ……」

玄関に、静座で待ち構えていた妹が飛び掛かつてくる。相変わらず鼻が曲がるような体臭だ。風呂には入つているだらうが、どうしてもこいつの匂いだけは耐え難い。

「くんなつてんだろアホ水桜！」

「あひんつ」

飛び掛かる妹を両手で押し退け、こいつの鞄もろとも外へと放り出す。

「ああんお兄ちゃん」

「暑苦しいわ！ ひとつと行け！」

どうも遺伝子らしい。俺が女性の臭いに敏感なのも、妹が俺の匂いに執着するのも。

## 澄川 美靴の再会

『澄川 美靴の再会』

胸のドキドキが止まりませんでした。少し冷たい朝の空氣を吸い込むと、オーバーヒートしそうな思考は余計に先走ります。

「綿峰 ちこり、行つてきます」

今まで気にもしなかつた表の表札に向かつて挨拶。大げさかもしないけど、わたしにとっては一世一代の決意。今日こそみくちゃんとの距離を縮めるために、このお弁当を捧げます。

出水くんの親切を、猫井さんの提案を、わたしは絶対無駄に出来ない。協力を申し出た分責任は強く感じています。だから尚の事くじけられないのです。

どんなに引っ込み思案でも、自分を追い込めば何とかなる。何とかなるはずなのです……。

「みくにはもうこみの方から話が行つてゐるらしい。待たせるのも難だからもう行くぞ」

「うう……まだ心の準備が」

「……」

時は昼休み、校舎の3階。今までに本番の時。

「それで、何でずつちゃんと付いて来てるの」

「あんたみたいな危険人物と一緒にいるなんて聞き捨てならないでしょ」

「別に悪いとは言わないし俺も嫌じゃないけど、今日は大事な作戦があるんだよ」

「その作戦内容を聞いてもわざから話逸らしてばっかじやん！」

白状するか私を連れていくか、どちらにしなさい」

……結局わたしと、出水くんと、一枝ちゃんの3人で行くことになりました。

「それで……本当にどこへ行くつもりなの。それすら教えてくれないの？」

出水くんが先頭を歩き、追随するよう一枝ちゃんが歩く。最後に弁当を持ったわたしがトコトコと付いて行きます。

「校舎の屋上だよ」

ぽんと飛び出た彼の言葉に、ピンと来るものがありました。この校舎にも屋上はあるのは想像出来るけど、そこに行つたなんて話は聞いたことが無いのです。

私が小口を開いたままでいると、一枝ちゃんは素の声色で訊ねかけました。

「え、この学校に屋上なんてあったの？」

「あるにはあるんだよ。普段は入れないよう扉に鍵が掛かってるけど、その鍵がポンコツでちょっと手を加えると開く様になつてんだ。でも生徒規則に反するから、普通の生徒はわざわざ入ろうとしない「屋上でご飯……」って、意外と有るようで無いみたいです。でも都合よくみんなが規則を守るのも変な感じを覚えるのです。

「でも規則だからって、みんなちゃんと守ってくれるものですか？」  
「その辺はある程度心配ない、この学校は部活至上主義だからな。ある規則を犯したら、そのペナルティーは所属部活動そのものの責任になるんだ。個人の懲罰ならともかく連帯責任なら下手な行動も出来ないんだと。これもこみみからの情報」

その話を聞いてわたしたちはある程度納得がつきました。

他の生徒の目から遠ざかる必要があるのは出水くん個人の意向と、わたしたちの作戦をより確実に成功させるため。だから現状において屋上はベストポジションという訳です。

普段見ている廊下をずっと奥へ奥へと歩くと、普通のより横幅が半分ほどしかない階段がふと目に付きます。そこを上がってから、

短いタラップを伝い小さな足場に出る。ようやく慣れ始めた学校の中であるのに、少し探検気分になっちゃいます。

「！」を外して……よし、じゃあ開くぞ……」

出水くんはいつもと変わらぬ糸目をしていましたが、顔は少し強張っていました。みくちゃんとは幼馴染と言つても、1年以上会つてないから緊張しているようです。わたしは別の意味で緊張しているけど、彼の顔色を見ていると少しだけ心が落ち着いた気がしました。

キイイ……と鋸びついたヒンジが声を上げます。それが階段の下、廊下の向こう側にいる生徒たちに聞こえたと思うと少し罪悪感が……でも今はそんな事気にしているられません。

「…………み、みく！」

暗がりの通路から青空の広がる屋上へ出た瞬間、日の光が田をくらませました。その視界が戻らぬつむぎ、出水くんは彼女の名前を口にしたのです。

「と……常葉くん……？」

扉からずつと離れた向かいのフェンス。そこには、わたしがいつも田で追っていた彼女の姿がありました。

肩に付く程度の長さで切りそろえられた端整な髪。それを飾る黄色いリボン。とろんと垂れた大きな瞳。……今この瞬間でも、じつと見とれてしまいます。

声を掛けあつたのに、不自然に離れた距離を置いたまま出水くんは話します。

「その……久しぶり。元気だつたか」

「…………うん。元気だつたけど、私ちよつとがっかりしてるんだよ」

「え？」

「お互い同じ学校に居るつて事に気付かなかつたのはしようがないけど、他の女の子から話を聞いた時は、あーあーって思つちゃつたもん。本当だつたら、常葉くんから突然話しかけてきてくれて、私がええつ！？ って驚いて……ってところまで考えたのに」

あれ……何か空気がおかしくない?

「……ははっ、変わつてないなみくは」

「やうじゅう常葉くん」いや、相変わらずみたいだね」

と思つた矢先には、お互に穏やかな笑顔を浮かべている。

「久しづり、常葉くん」

「ああ」

お互に歩み寄りちょづき屋上の真ん中あたりで対面する。

正直、こんな近くでみくちやんを見るのは初めてだつた。

「ひぢらの2人は誰なの?」

つこにみくちやんがわたしと一枝ちゃんの方を見ながら訊ねかけてきました。

「いじちは綿峰 ちこつ、1年B組の子な。んでそつちが五木一枝、同じくB組。今日は挨拶と言つか何と言つか……とにかく一緒に昼飯でも食おうぜ」

「そうなんだ。私は澄川 美靴。五木さん、綿峰さん、よろしくね」「いじわらじよしへ、澄川さん」

「いじわらじよし、いじわらじよし……」

こんな近い距離で語りかけられたら、と思つただけで緊張してしまふのに、実際に話しかけられると喉が痙攣してまともな声が出てこない。そこに情けなさが油を注ぎ、余計に喋れなくなる。車輪が外れた車の様に、勢いに乗せた分だけ激しく壊れる。

「あ、えとこいつすげー恥ずかしがり屋でさ、こんな調子だから友達も出来ずにグエツ」

「お前が言うか出水」

一枝ちゃん、みぞおちはキツいんじゃ……

「私も出水もちこも部活に入つてないの。澄川さんも入つてないつて聞いたから、無い者同志の集まりつて事で。ほら弁当広げようよ」「一枝ちゃんには作戦を伝えていいけど、わたしの願いはひちゃん

と伝えてあるから気の利いたフォローをしてくれる。言葉では伝えきれない様な感謝を表情で示そつとすると

「口に何か入れれば落ち着くから。座つて座つて」

そう声を掛けてくれました。……こつまでもフォローされてばっかりじや意味がない。

わたしの力で、前に進まないと。

猫井さんはちやんと「屋上でお弁当を食べるから」と囁いてくれたらしく、みくちゃんは可愛らしげに包みをほどいて、手のひらに取りそなうな小さい弁当箱を取り出しました。弁当を渡す時は、あえて手前の分は持つてこむせるのがポイントだと。理由は分かりません。

「あ、そうだ。これを渡しておかないと

わたしが弁当をいつ渡すかタイミングを図りあぐねていた所に、出水くんは懐から何かを取り出しました。

「これ、みくの一ーソン

「あ、あれ？ 私が無くした……なんで常葉くんが？」

「いやー落ちてたのを拾つてさあ」

はわ、はわわわ

なんて爆弾取り出したのですが出水くん

「それなくしたの2日くらい前だよ？ あんまり嗅いだりしたらやだよ、恥ずかしい」

「なあにちょっとだけだよ」

「ちょっとの度合いがわかんない！ しじうがないな……えへ」

何だろ？ またまた変な空氣感。これが幼馴染パワーなの……？

「はい、返す」

「ありがと拾つてくれて」

……でも、なんだか屋上に侵入した時よりも大きな罪悪感が胸を襲ってきます。本当はわたしが返すつもりで いいえ、実質盗む

ような事をしてしまったのに、出水くんは泥をかぶることも厭わないでちゃんとニーソックスを返してくれた。

「そのままじゃわたし、ここにいる資格なんて……

「それと、ちこもみくに渡すものあるんだよな」「えっ？」

ふと話を振られて何事かと思つたけど、わたしなりにすぐ意味合いを理解しました。

自然に弁当を渡すタイミングは、今しかない。

「あのっ！」「こここれ……」「

包まれたままの弁当箱をそつと差し出す。

「お弁当？これ、私にくれるの？」

顔が熱くなりすぎて肌が爛れそうだった。これ以上話したら骨が溶けてしまう。

必死の思いで、わたしは「クリと一つ頷きました。

「ありがとう！ こういうの久しぶりだなあ。他の人のお弁当つてわくわくするよね！」

何の疑いもなく受け取ってくれた、その驚きがうれしさに変わる。心の肌がふわっとくすぐられたような感じがして、幸せ色に染まつた。

「どんなお弁当だろ。さあて……よいしょ」「

パカリと上蓋を取つて覗き込むみくちゃん。その様子を見てわたしは

「うわあす」に綺麗！ 綿峰さんつて料理上手なんだね！」「

わたしは、凍りついた。

「…………え、えへ」

野菜の彩も、ご飯の具合も、ちゃんと考えられている整つた弁当。こんなの私が作れるわけがない。でも何で、現物が目の前にあるのか。一体誰がこの弁当を……

「…………」

作つた人が、わたしの右隣に居ました。

出水くんは口元を不自然に吊り上げ、額には分かりやすい冷や汗を浮かべます。その様子を見てわたしは全てを悟りました。

『弁当だろ弁当。お前が作った分はちゃんと包んでおいたから、忘れずに鞄に入れろよ。俺もう行くから』

今朝、出水くんはわたしの家を出る時、自分の分である一つを持って行きました。テーブルの上にはわたしが作った二つの弁当と、出水くんが作った弁当が一つ。

彼は間違えてわたしが作った二つの内一つの弁当を持ってこき、わたしは自分の弁当と出水くんの弁当を鞄に入れ、重ねて運悪くそれを渡してしまった。

「こんなお弁当本当にもらつていいの？」

みくちゃんは笑顔でわたしに訊ねかけてきます。それを見て思つのです。

別にこのままでも良いんじゃないかと。

わたしの作った実際の弁当なんか、彩が悪ければ素材の形も崩れてるし、意地になつてひとりで詰めてみたらぐちゅぐちゅの構成になつたりで、今思えばとても人に見せられるようなものじゃない。でも、整つた出水くんの弁当をわたしのだと言えば、わざとみくちゃんは今の笑顔のまま食べてくれる。その方がきつと……

「（おい、ちこ）」

出水くんが聞き取れないほどの小さな声でわたしを呼びました。

「（なん……ですか）」

「（このままじゃ不味い。みくが俺の弁当を持つているのはともかく、今の状況だと俺とお前が同じ弁当を持つてるって事になるんだぞ）」

はつ 確かにこのままだと、わたしと出水くんが一緒に弁当を作ったという事が自ずとバレてしまつ。作ったのは弁当だけじ、一枝ちゃんを含めてあらぬ誤解を招きかねません。

どうしようつ……どうすれば……！

「ふんふんふん　じゃあいただきます」

「（おい、ちい……！）」

私は　もうこれ以上……！

「ち、ちょっと待って！」

勢いに乗せたまま声を上げその場に立つ。

「どうしたの……？」

ぽかんとした顔でわたしを見あげるみくちゃん。その純真な瞳が、余計に心に刺さったトゲを深く刺し込む。これ以上　いや、せめてこれだけは嘘をつきたくないから！

「ごめんなさい澄川さん！　わたし、荷物を出水くんに渡したときに弁当が混ざっちゃってね、えと、その、これが……本当に、私が作つたお弁当で……」

やつぱり勢いだけじゃ持ち切らなかつた。卑怯な事を考えていた自分に腹が立つて、恥ずかしくなつて、膝元にある弁当をハイと言つて渡せない。

「あ……ああ！　よく見たらそれ俺の弁当じやん！　氣付かなかつたわーごめんなー。という訳でちこ、正しくなるように交換だ」

「ちょっとバカじやないの出水！　あんたの弁当なんか食べたらどんな病氣になるか分かつたもんじやないってのに」

わざとらしかつたけど、一枝ちゃんが突つ込んでくれたおかげで自然に弁当を回せました。

これで本来の形に。でも、だからといってわたしの弁当が見栄え良くなつた訳じやない。むしろ出水くんのを先に見たから、余計に見劣りするに決まつてます。

結局、嘘をついた時と同じくらいに後悔の波が襲つてきました。

「うちが澄川さんのお弁当なのね。じゃ、いただきます」  
もうどうにでもなれ……元々、わたしが悪いのだから……

「ん、おーしー。確かにちょっと崩れてるナビ、このへりこの薄味  
がちょうど好きだなー」

聞き間違えだと思った。それを確かめるために顔を上げると、わ  
たしのお弁当を手に持ったみくちゃんがにっこりと笑いながら言つ  
てくれたのです。

「ありがとね。えーっと……ちーすりやん…」

もう……言葉もありません。

出水くんがみくちゃんの方を見て2度頷くと、今度はわたしに向  
かって言いました。

「美味しくて当たり前だつて。同じ材料を適量使つてればね」

「……？ ちょっと出水」

一枝ちゃんがピクンと反応しました。私も少し遅れて、その言葉  
の言わんとする意味合いに気付きます。

「何であんたがそんなこと知つてるのよ。同じ材料を適量つて」

「あ、ああ！ 深い意味はないつて！ 近所なんだから使うスーパ  
ーも同じだし、ほら美味しいイコール適量つて事だろ？ そういう  
意味だつてば」

「ふーん……」

「そうだよな、ちこ？ ほら試しに俺の弁当も食べてみろつて  
首の皮一枚繫がつた……ようです？ そう安心したわたしは、咄  
嗟に差し出された出水くんのお弁当に一つ手を付けました。

「ダメだよちこ！ こいつのおかずなんか食べりや……！」

「だ、大丈夫だつて。同じ材料なんだし」

「そうだよ。同じ材料なんだし、こんな美味しいそうな餡の掛かつた

鶏肉が

「もぐも……ふぐつ！？」

鼻腔を刺激する衝撃的なまでの酸味。なんですかこれ、酢の感じ  
でもない。それに少し甘い匂いがしたと思ったら、舌の上がピリピ  
リと……

「ひ、まつ……うぐう……」

肩と背中の力が抜けて座り姿勢のまま頸垂れる。  
出水くん、本当に同じ素材を使ったのですか……？

## 猫井　こみみの策謀

「むふう、君たちに集まつてもらつたのは他でもない  
寄せられた4つの机、狭苦しい空間、そこに差し込む窓からの陽  
光。悪くないです。

「……それでこみみ、俺たちをここに集めて何を始める気なんだ」  
まったく出水は顔がまつたりしている割にはせつかちで。きっと  
下のマス焼きも早いんじやないかと思うこみみです。

「あの……顔を合わせるのは初めてなのに、急かすようですがみませ  
ん。でもそろそろ教えてもらえると」

出水に依頼を持ち込んできた張本人、綿峰　ちこり。ちゃん付け  
で呼ぶと長たらしい感じがするからちこりんと呼ぶことにしている  
のです。

「…………」

彼女の隣に座っている女子生徒、五木　一枝。ずつちゃんにはも  
う話が通してあるです。

私、猫井　こみみには予てよりの野望がありました。

それはこの学校の部活システムを利用して、理想的な生活を送ること。  
……ただそれは、こみみだけが考える事じゃない。同じ画策  
を立てる人が多すぎて、条件は当然のことく厳しくなつていったの  
です。

ここには本校舎の西側にある木造の建物、利用する生徒たちはみな  
旧棟と呼ぶ古い校舎。昭和に建てられた基礎を繰り返し補修して、  
外観はそのままだけど内装は迷路になつてているという不思議な構造  
を持つています。

その角の角。2階の隅つこにあるこの部屋に、こみみはこの日ま  
でに関わったターゲットである3人を揃え、我が野望を本格的に推  
し進める為この円卓会議を開いたのです。

「よおしおおし、教えてあげよ。」みみがみんなを「ここに集めた理由を」

「みみは悪魔でも大将でもあります。明朗で立派な淑女であり、常に人の事を考えます。自分の野望を叶えたいからって、他人を無視しては通るものも通りません。

……もつとも、他人を利用するといつ言わわれ方をすると、少し怪しく見えるかもね。

「綿峰ちこりくん、言い改めてかこつん。」みみは貴女の願いを叶えるために色々手助けをしました。その結果と感じている恩を述べるのです」

彼女は少しの間を置いてから口を開きました。「いやらぬぐく丁寧に話そうとする子なようです。

「わたしは澄川 美靴ちゃんと仲良くなりたくて……それで出水くんに手助けを頼んで、間接的に猫井さんにもお願いをしました」「ああ、」みみの事ならみみって呼んで構わないよ

「えつ……ど、んー……」みみちゃんに手助けしてもらつたおかげで、お皿はみくちゃんと楽しくお弁当を食べれました

「途中で誰かさんの弁当をつまんだせいでリタイアしかけてたけどね」

「何だよずつちゃん……俺はいつもの通りに作っただけなのに」「話に平氣で割り込むずつちゃんに、すぐ応えを返す出水。「ミコニケーション自体は粗雑だけど、この2人はなかなか場の雰囲気を保ってくれそうだですね。

「続けてちこりん」

「はい。廊下での挨拶もちゃんとできて、放課後も声を掛けられました。まだ理想には達していないけど……本当に、みんなの協力に感謝してお~」  
？」

礼をして机に頭をぶつけた……古こというかベタだけど悪くないですNE、ちこりん。

「たたた……えと、そういう訳でお返しきれない程の感謝でいつも

ぱいです」

「そうでしょ、うひうひでしょ。だけどちこりん、それだけじゃ不安でしょ。実際に仲良く離れても、それ以上の関係には成れないね」「それ以上……の関係……」

「むはあ、驚いたような顔してる。でもあなたがガチ（・・）なのは、こみみの目に掛かれば即お見通しですよ。目の色が違うもの。気付かれない方が不思議でござる」。

「だからこみみは応援するよ。より深い関係になるために」「ど、どんな方法で！？」

机に手をついて顔を上げるちこりん。他の2人と見比べると、その必死さは余計に際立つものです。たやすくちちゃんにはともかく、出水はよつほど気付かないだらうなあ……。

「考えて見なさいです。みくちゃんと同じ部活動に入れたら、より仲良く親密になれると思いませぬか」

「それはもちろん！ でも……彼女は部活動に入つてないし、そもそもわたしにそんな行動力は……」

「のんのんのん。失礼ながらそれを見越しての質問でござる。タゲは部活動に入つていない、ちこりんも部活動に入つていないとこから導き出される答えは一つ」「な、まさか……」

出水が糸田をさらに細くしてこみみの顔を見あげてる。ここまで至ればもつたいたいぶる必要はどこにもないです。

「そう！ こみみたちで部活動を作つて、みくちゃんを入部させればいいのですよ！ それなら既存部活動のしがらみに悩むこともないし、思つよろしく活動を開拓できる。まさに最強最良の選択なわけですよ」

「で、でもこみちゃん。部活動つてそんな簡単に作れないはずだよね？」

呼び捨てでも良いって言つたのに……でもちこりんのよつ性格の人は難しいか。出水に言われたら腹立つけど、彼女ならこみち

やんでも全然可愛く聞こえるね。

「ちこりんご明察！ 物語高校で部活動を設立するには大きく2つの条件があるの。まず1つは初期部員が5名以上かつ掛け持ちなし。2つ目はちゃんとした活動目的があり、かつそれが公的な競技や公募を指すものである、だね」

「公的な云々ってのは何だ？」

「別に難しい事じゃないよ出水。野球部なら甲子園、ボーダーゲームなら対応する大会、数学部なら数学オリンピックなんてのもあるね。結果を残せる目標が無いと、散漫な活動目的の部活が乱立しちゃうから」

「へー……そいつは知らなかつた。……で、5人つて事は完全に俺たちを数に入れてないか」

「こみみが情報出したり協力した事の代わり って言えば解つてもらえるかな？ もし反対するなら、現況をほとんど知り得てるこみみが人間関係を滅茶苦茶にすることも出来るんだよ？」

「お、お前なあ……ずっとちやんも何か言つてやつてくれよ」

「でも……私は」

無駄ですよ出水、ずっとちやんには詳細たる話が既に行つてますから。

「……じゃあ話を聞くだけ聞く。何の部活を作るつもりなんだこみみ」

そここの言葉を待つっていたですよ出水。

彼には以前から仕込みを入れていました。ライトノベルや漫画を読みこませ、興味をある程度持たせる。刷り込みが上手く行つてなくとも、こみみの提案に猛反対する事はないはず。

ただ1人不明瞭なのが、綿峰 ちこりという存在。学校における立場は観察してある程度把握しているけど、それ以上の事はさっぱり解らない。趣味とか身分とか、見た目の割りには謎な子です。まあ気にして仕方ないです。

「こみみが作る部活のテーマ！ それは……  
すばり、ライトノベルなのです！！」

決まった……。こみみのやりたい事はずばりこれで「じぞー」。  
「何だそれ…… 文芸部とかに入れば済むんじゃないか。それにラノ  
ベで公募って……」

まったく男のくせにロマンがないですね出水には……  
「乗っかりじやダメなの。文芸部は文化系だとそこそこ規模が大き  
いし、より差別化するとなれば分けるのが妥当つてもんでしょうが」  
それにこみみが独裁じやない。

「ライトノベルの方が公募に関しては選択肢豊富だかんね。」（  
げーあー）文庫に演劇文庫に澄川スニー カー文庫にまふもふ文庫…  
内容は微妙に違つたりもするけど、おおよそレベルごとに公募  
があるの。部活の目的としては十分すぎるつて

「ラノベ書きたいなら1人で書けばいいだろ、部活にするほどでも  
ない」

「こみみが書くんじゃないし。それに建m……いや、理由としては  
冒頭の説明通り、みくちゃんを入部させる事が目的だかんね。出水  
も知つてるでしょ、みくちゃんはラノベが好きだつて」

「みくがそういうの好きなのは確かに……つて、お前が書かなきゃ  
誰が書くんだよ！」

「それは君に任せると。こみみがやりたいのは作品作りのサポート  
役なんだし」

「はああー？ お前強引なのもいい加減に」

突然大きな音がした。バンッ、という机を叩く音。何事と思い視  
線を横に送ると、そこには顔を伏せ氣味にして小刻みに震えるちこ  
りんの姿がありました。

雰囲気がまったく違う……“威圧”と呼べるもののが映っている気  
がした。

「それだけは……絶対に嫌だつ……！」

狭い部屋に彼女の声が響き渡る。

予想に反する答えた事はすぐにどうでも良くなつた。  
何……？ まるでレバーを引いてスイッチを切り替えたように、表情も声色も変わつている。威勢が良いだけじゃない。一言で表すのなら……そう、この瞬間男になつてしまつたような。

「ラノベなんか……臭くて、ダサくて、欲望だけは一人前のキモオタが読むものだつての……。それを作つたりして奴らなんかは、碌でもない妄想をトレンドだと聞いたげにゴミを量産し続ける……。そんな職を目指す奴に至つては、何も出来ないクズのクセに、小学生以下の文才でゴミを他人に送りつけ、その程度で人の上に立つ事を妄想しているんだ！！」

「何……？ この子いま何て言った？」

ラノベを馬鹿呼ばわり？ なんなの？ 確かに進んで馬鹿をするような事はあるけど、真正面から否定されるとなれば、この私が我慢できるはずが無かつた。

「あれれー……何かこみみ、聞き逃しちゃいけないような言葉が聞こえたなあ……」

夕日が街並みの向こうへと消えてゆく。

あれから発生した騒ぎは、出水の直球かつ大胆な行動により収まつた。もっとも、保健室で意識を取り戻したちこりんが警察を呼んでいない限り、これ以上変な事にはならないはずだけど。

「はあ……ちこりんがあんな挙動取るとは思わなかつたなあ……」

完全にこみみのリサーチ不足。彼女が“ライトノベル”というワードに引っかかると、まるで男になってしまったかのように激しくなるなんて。これじゃあ叶いかけた部活設立の目標も一気に白紙に戻りなのかな……。

「あのっ……こみちゃん！」

「ふえ……？」

なんだか力不足な自分が情けなくなつて、夕日が少しにじんで見えたその時。校門を出ようとしたこみみの後ろから、息切れの混じつた声が飛んで来たのです。

「ちこ……りん？」

「はあっ……はあっ……」

そこには膝に手を添えて激しく息をついているちこりんが居ました。声色、いっぱいいっぱいな表情、内股になつていてる格好を見る分には、どうも女の子のちこりんに戻つたようです。

「わたし、どうしても……言つておかないと……あんなに怒鳴り散らして……」

はー……一応覚えているんだ。自分の人格が変わった事。

「こみみは別に気にしてないよ。それで、何を言つて？」

「こみちゃんは……元々、わたしの事を考えて部活を作ろうとしてくれたんだよね。みくちゃんがラノベ好きだつて事も先に知つた上で」

「いや、こみみの元々は自分の……」

「そうなの！ 自分の好き嫌いだけで、チャンスをふいに出来ないつて考え方直したの！ それに今まで協力してくれたこみちゃんの努力も裏切れないし……」

あれ、これは乗つかつた方が良いフラグ？

「……ま、まー確かに努力しましたが！？ あーでもちこりんが辛いなら？ 別に無理しなくてもいいっていうか？」

「とんでもないです！ わたし……確かにライトノベルは、今のところ好きになれないけど……みくちゃんの為に、それにこみちゃん

やみんなの為にも、好きになりたいんです！」

「 その心、はっきり聞かせてもらひよ」

「みみが真剣な表情を一瞬見せると、彼女は口元を結んで小さな

間を置いてから答えたのです。

「わたし、やります！一緒にライトノベルの部活動を作りましょ

う！」

彼は突然遠くへ行つてしましました。

親の都合なのはしようがないけど、私の気持ちが整わない内に愛知を出ていつてしまつた。

それがどうしても許せなくて 違つ、許せない自分が情けなくて……ずっと連絡が取れない内に、とうとう機会を失つてしまつた。そんな喪失感に溺れながら、私も親の勤め先を頼り東京へ来た。そしてこの物語高校に入り……再び出会つた。

本当に彼が居る事は知らなかつた。もし入学する前に知つていたとしたら 私は何としてでも別の学校に行こうとした。そのくらい、心の歪みに踊らされていた。

でも声を聞いただけで、今までのじがらみが無かつたと思えるくらい、自然に顔を見て話す事が出来た。  
やつぱりす』いんだなつて思つたのです。人を繋ぐ、この気持ちが。

「みく、ちょっと」

2時間目が終わつた直後、教室の入り口から私を呼ぶ声がしました。彼の事は声変わりする以前から知っています。顔を見なくたつて、声だけで表情が手に取るように解ります。

「どうしたの常葉くん……と、ちこちゃん」

「急に呼び出したりして悪いな。ちょっと話があるんだ」

「私は全然大丈夫だよ。それで話つて?」

「ほら、ちこ。お前から言わないと」

「うん」

……この子。

「は、はのっ! わはよつ! じあます!」

「あ、おはよつ! ちやん。そんなに畏まなくて、友達なんだし

「そ、そうだよな、うん。で……えっと何て言つんだっけ出水くん……？」

私が出水くんと会つた時も、おそれく会つ前も、たぶんこの子は彼と一緒にいる。

どういう関係なのかは分からぬけど、少なくとも私にとつては歓迎出来ない相手に見えます。だって今もほら……何気に学ランの袖を掴んでるし……。

「……で……だろ」「ひ

「う、うん……」

私は特別怒りっぽい性格ではないはずだけど、田の前でひたひた話されると無性にもやもやしますね。何でしょこの気持ちは。「えですね……わたしの、いやわたしのじやないんですけど……」「え?」

「澄川……んや、みくちゃんもゼひ、私と同じ……」

「同じ……何かな?」

少し間を置いてから、彼女は大きめの声で言つてきました。

「同じ、部活に入つてほしいの!」

「え、ええ?」

突然かつ予想もしていなかつた申し出に、少し退き氣味に反応してしまいます。

「同じ部活つて言つてもね、今から作る部活なの。部員は定数で5人必要なんだけど、あ、決してみくちゃんが数合わせとかじゃなくてね、出水くんとかみちゃんとか一枝ちゃんとかと一緒にね、その……ラノベを作ろうつていう集まりなんだけど……」

彼女のたどたどしい説明に付け足すよつて、常葉くんは横から説明を入れました。

「元々の発案はこみみなんだよ。何でもあいつの姉が本物のラノベ編集者らしくてさ。その真似事……つて言つと怒るんだけど、似たような事を今からやりたいって言つんだ。お前昔から少年誌とかライトノベルっぽいの好きだったろ?」

確かに『ぼくらの七日間戦争』始まり『ロードス島戦記』とか『

スレイヤーズ』は読み込んで今もいつぱい持つてるけど……

「えと……私と、常葉くんと、一枝ちゃんと、猫井さんと……むちちゃんで5人なんだよね」

「そうそう。5人の掛け持ち無し部員じゃないと設立できないんだってさ。俺が知ってる部活動に入つてない生徒って言つたらお前ぐら이しかいないんだよ。な、考えてくれないか?」

何となくこの学校に入った私は、部活動が盛んなことなど事前に知る由もなく、今まで加わりたい活動を見れなかつたからどこにも所属しなかつた。

もちろん常葉くんと同じ部活動に入れるなら、申し出を歓迎したいです。でも……

「その……ちょっと無理かなつて……」

「ええっ! ?」

反応まで一緒に

「だつて私勉強追いつけないし……」

「お前中学の時からテスト480点代の超優等生だったりうがう……」

「頼むお前の力が必要なんだよみく!」

「何でそんなに……必死なの……?」

「みくちゃん……」

「とにかく、今のところは無理。授業始まるよ常葉くん」

「おっ、あ、ちょっと待てよみく!」

私は身を翻して自分の席に戻る。そして一瞬入口の方を確かめると、教室へ入るうとしていた先生に道を譲つた2人の姿が見えた。そしてのそのそと廊下へ下がると、先生がピシャリと戸を閉め切つてしまつた。

「……で、この関数を……」

授業が始まり、ざわざわと雑談で溢れていた教室が静まり返る。

聞こえるのはカツカツと書つチョークの音と、先生のぼそぼそした声。いつもの光景、当たり前の作業であるはずなのに、私のシャーペンは無意識にルーズリーフの外へとはみ出していた。

「あ……」

いつ誰に見られても恥ずかしくない、むしろ自分から誇れるようなノート作りは昔から心がけている習慣。成績が良くなつたのはそれからだけど、決して結果は意識しようとはしなかつた。彩りを付ける訳じゃなく、塗りつぶす勢いで書き込む訳でもなく、的確に整然に揃える。それは今まで変わらぬ行為であり、保つべき意識であつたのかもしれない。

「（あの時以来だ……）」

心が揺らいだあの日、私の神経はシャーペンの先まで行き届かなかつた。何度もノートの端から滑落し、机に落書きをし、後で惨状を田の当たりにすると、その田の終わりに冊子」と「ミニ箱に捨てた。翌日、先生にノートを突き返された。

私は先生に諭された後、常葉くんが愛知を去つた事を知つた。引っ越しが決まつたのは以前からだつたけど、私が知られたのはつい2日前。

『その……お前に言うの、ずっと迷つてて……何て言つか』

常葉くんなりの優しさだつたのかもしれないけど、当時の私には理解出来なかつたし、今でも十分腹が立つ。幼稚園の頃からずっと一緒にで、仲良しで、これからもと思っていたのに、彼にとつて私は、数百キロ程度離れただけで縁が切れてしまつと思つ相手だつたと……。

だから私は諦めた。お母さんから常葉くんの携帯番号を教えられても、受け取つただけで電話はしなかつた。住所も教えてくれたけど、地図で確かめようとも思わなかつた。

「（また……？）」

そう、また同じことが起きよつとしている。彼はこの学校に、教室を一つ挟んだ向こうの部屋に居ると書つた。

手に届く距離に居るのなら きっと私は耐えられない。

チャイムが鳴つてから、すぐ廊下へ出る。そしてB組の前を通り抜けて一直線にA組の教室へと向かつた。まだ授業が終わった直後だからか、廊下に人影はない。

「…………」

何となく予感がして、教室の後ろ側にある戸の前で立ち止まる。10秒、30秒と経ち、廊下の向こうから声が聞こえてくる。歩みを進められない私を煽るよう、ヒヤヒヤと鼻に掛かつた笑い声で、背中を搔きむしる。

「おっ」

本当に来た。ガツと勢いよく戸を開いたのは、間違いなく彼だった。

「あ、えと、常葉くん」

現われる事が何となく想像が出来ていたせいか、余計に慌ててしまう。

「その……やつきの話なんだけど」

「ああ、部活の事？ もう一度ちこを呼んでお前の所に行こうとしてたけど」

彼は窓際の壁に背を預け、棒立ちになつた私に向かつて口を開く。

「お前が嫌なら、はつきり無理だと黙つてちこを納得させて欲しい」「…………え？」

「ま、本来の目的からズレ あいや、話しやすい相手をつて事でお前に相談したけど、みくだつて暇じゃないだろうし、今は小学生や中学生の時と状況が違う。お前の事だから、就職とか先の事をちやんと考えてるんだろ？ それをふいにさせたくないんだよ」

揃つてなかつた視線が真つ直ぐ交わり

「お互い、他人じゃないだろ」

……男の人って、本当に無神経でガサツ。自覚ないのがタチの悪さに拍車をかけていく。

「せつめの……あの、ね」

でも、その真っ直ぐさに

「あんな風に言つたけど……」

私の様な屈折した心の女の子は

「やつぱり私」

憧れたり、惹かれたりするかもしれない。

「うし、分かつた。ちゃんと伝えておく。じみみは明日集合を掛け  
るつて言つてたから、教えた通りの部室にちゃんと来いよ」

「うん……！」

私は彼に、謝らなければいけない事がある。

離れて縁が無くなる事、本当に恐れていたのは、やつぱり私だつ  
た。

別れの日を恐れ、別れた後も恐れ、今に至つては会える事さえも  
恐れていた。結局尻込みのしつぱなしだ。でも……

「あ、ちひねやん！ やつぱり入つてくれるんだってね！ 良かつ  
たらその……色々お話しを兼ねて、またお弁当一緒に食べませんか  
？」

もう、立ち止まつている訳にはいかない。

「うん！ でも今度からは、屋上に行けないね！」

## 猫井　じみみの馬鹿

窓から望む新しい風景。使い古された椅子に腰かけ、突風で割れてしまいそうなほど薄いガラス越しに、暮れはじめた空の色の移りを眺める。

今日は初めて全員が部室に揃つ日。だけど私は、今でも自分の状況に納得している訳じゃなかつた。

「もしもし兄貴？」うん、そうそう、いつもは送つてもらつてたけど、今日もつていうか、今日からしばらくは大丈夫だから」

『『『、どうしたんだよ一枝！　まさか彼氏とか……お兄ちゃん許しませんよ』』』

ピッ

「ふう……いつまでも過保護なんだから」

「どうしたのずっちゃん」

「別に、出水には関係ない。連絡しないと兄貴がうるさいからね。時間ない癖に私の世話つてなると絶対に飛んで来るから」

本当に　便利なんだけど逆に世話の掛かる兄貴。仕事忙しくくせにいつも……

「他のみんな遅いな」

「…………そうね」

ライトノベルを作ろう、そんな目標を元にじみみが作ったこの部活。元々私は冗談半分で賛同したのだけど、彼女が相当努力したおかげか、本当に正式な部活として発足してしまつた。

部活の名前を決めるとき、文芸部だと同じ部活が既にある、ラノベ部だとタイトル的に都合が悪いとちこりに拒絶された。

それからいくつか案が出たのちによつやく選ばれたのが……その名も『本部』。

「みみは「本を扱う部と本拠地であるという意味を掛けているのだ！」とどやかな顔をしていたけど、なんだか変な空気になつてこ

つちが恥ずかしくなつたことだけをよく覚えている。恥ずかしかつたりややこしい名前にならなかつたのは幸いだつた。

「ずっとちやんのお兄さんつてよく車で迎えに来てくれてたもんな。顔色悪いけど『ご』い良い人じやん。そんなに家まで歩くの面倒だつたか？」

「あ・ん・た・の・せいでしょうが！　あの事件の後、私しばらく人前歩けなかつたんだからね！　どこでもひそひそ声を立てられて……本当にトラウマになつたんだから」

「へー……そんなことよりみんな遅いなあ」

「そんな事つてどんな事よ『ゴルア』……」

「痛い痛い痛い痛い！　手の甲『ゴリゴリ』するのやめて！　本当に痛いから……」

「今度悪意あるバカ言つたらチエーン巻きつけて引きずり回すから……」

そんなやり取りをしていると、入口の扉がガチャリと開かれて3人の女子生徒が入つてきた。

「おつまたせー。2人とも変な事してなかつたかい？」

「ちこりと美靴を引き連れたこみみは、ニヤニヤと薄気味悪い笑顔を浮かべながら部室に入つてくる。

「顔見て早々アホな事言わないでよ。それで、ずいぶん来るまで時間かかつたようだけど……何かあつたの？」

そう訊ねながら、部室に揃つた5人はそれぞれの椅子に腰かける。こみみは一応部長なので4人とは向かい合わない位置に椅子を付けてから本題に入った。

「それではこれより、第1回本部の会議を始めようと思うのであります。まず最初に話すべき事は色々あるんだけど……それ以前に1つ、先ほど問題が発生したのです」

美靴は少し体をかがませて反応する。

「問題つて……何ですか？」

「実はですね、この部室が没収される危機にあるのですよ

「ど、どういう事だよこみみ」

出水は顔を上げて彼女に訊ねた。

「いやね、今は5月なわけで、既存部活動の募集期間が終わったから、こみみ達にみたいな新興部活動が増えてくるのだよ。でも余っている部屋はほとんどない訳だから、有望な新興部活動が出来た場合、この部室を他に取り上げ有れる可能性が濃厚、と通告されたの話を聞いたちこりは、早々に反応した2人と違ひ冷静に考えを口にする。

「でもそれって、ちゃんと眞面目に活動しなさいって言つ忠告みたいなものじゃないのかな？ 先生に言われたのなら、お約束な文句だと思つけど」

「まーちこりんの言う事も大体は間違つてない。でもね、こみみは一度手に入れたものを他人に易々と奪われるのが大嫌いなの！ そこでこんな作戦を用意しました」

ガンツと勢いよく机に叩きつけられたのは缶詰。だけど普段見るシーチキンとかの缶よりは一回り大きく、そして若干表面が丸みを怯えている。

「なに……これ」

言葉に詰まりながら私が訪ねると、こみみがその口を開いて説明する前に出水が奇怪な声を上げた。

「ふーっ！？」

「どうした！？ い、出水！」

田の前に座っていた彼は鼻を押さえて目を見開いている。とつさの勢いで立ち上がりみると、鼻よりも先に田の刺激を覚える。そして冷静に嗅覚を澄ませてみると……

「なにこれ……臭い」

ほんのり、だが確實に臭う。何これ。

原因は探るまでもない。こみみが机に叩きつけたこれに違ひない。

「何ですこれ……？」

不思議そうに美靴が顔を近づけると、匂いに気付いたのか一瞬顔

をしかめる。しかし、人のものにケチを付ける事が気に掛かるのか、すぐに表情を戻して訊ねていた。

「まあまあ。ほらすつちゃん、缶に書いてある名前を読んでみて」

「うん……スース、トロツミ、ングス……？」

私に続く様にして美靴が英語？ らしき文字を読み上げる。

「スルス、トレミングス？」

「はいみくちゃんほぼ正解、さすが優等生だね！」

「え、えへへ……」

「ちつ」

別に英語なんか読めなくたって死なないし？ あとこの上に付いてる点々は何？

「これはシユールストレミング。中身は単純にニシンの缶詰なんだけど……ま、どういうものかは出水を見ればわかりやすいと思うよ」「ふ」ひつ、むきリコアアアアツアア！」

……キモい。鼻を押されて奇声を上げ続けている出水。まるで襲い掛かるものから逃れたいのに、あまりの恐怖から腰が上がらなくなつた子供の様な……どこかもどかしい苦しみすら見て取れる気がした。

「あのように、敏感な人なら失神しかねない様な悪臭を放つ事から、世界一臭い食べ物として知られている伝説的食べ物よ」

だから奴はこんなにも悶絶しているのか。さすがに洗濯された布の匂いを時間差判別できる超人には過ぎる刺激らしい。キモいけど、見ててちょっと面白い。

「さてこれを今から開ける訳ですが

「ちよつと待つてこみみ！ そういうのって屋内でやるものじゃなくない！？」 くさやだつてガスコンロで焼かないでしょ？」

「まるでくさやを食べたことあるような語りだねすつちゃん……もちろん、それを解つて、むしろそれを狙つてるのでよこみみは」「いやいやいや話聞いてる？ 世界一臭いものって言つたら匂いすごいよ？ 車内で腐った鶏卵ですら大変なのに、ドリアンに至つて

はあまりに臭すぎて大食い大会が中止されたのよ！　臭いの世界はほんま恐ろしいんやで！！

「なんで関西弁になつてるのか」こみみは理解に苦しむですが。とにかく理由はあるわけですよ」と

そう言いながらこみみは“家庭科室”といつタグが付いたままの缶切りを手に持つて言う。

「新規に部室を手に入れたい輩たちは、やつぱり追い出したい部活よりも手に入れたい部室を選ぶもの。だからこの部室をシコールストレミングに染めてしまえば、田を付けられたとしても臭いバリアのおかげで守られるつて事なのだよ！」

「それじゃあ部室以上に大事なもの失うつて！　ちょっと待　　」

言葉の介入を耳にも留めないこみみ。そろそろ本当に不味いと思いつ私が手を伸ばすと、指先に触れた反射で缶切りの刃が地獄の門を叩いた。

「「「「！」」」

声にならない声つてこいついう事か。一瞬だけ、そう考える余裕が出来た気がした。

それを現実逃避と認識する頃には、もう眩暈のする程の悪臭に捕らわれた後になる。つまり手遅れな訳だ。

「まつ……窓……窓……！」

美靴がハイハイしながら窓の方へと進む。しかしこみみは、自分の鼻をつまみながら大声で叫んだ。

「だめにやみくひやん！　臭いがていひやく（定着）しにゃいれひよつ……『ふえつ！？』

そりや口で息すれば鼻にも入るでしょうが……。

「うー……！　こんなの、定着もへつたくれも……！」

そう呻きながらちこりも窓の方へ向かう。しかし2人とも数歩進んだだけで力尽きる。床に顔を付けるとひよひよと弱弱しい声を漏らしながら一切動かなくなってしまった。

「……ね、ずつちゃん。解つてるとと思うけど

「「」おでしておこて何を解れつてのよー。」

「「」のシユールストレミングをどうすねば良いかつて話だよ」

「そんなのじつかに捨てれば

「無理。生「」み投棄ならともかく、こんなのは放置したら警察沙汰だ

よ。しかもこれ1缶5千円するし」

「それを自腹つて本当にバカじゃないの……」

「いや、部費だけど」

「バー カバー カ！ ホントにバカ！！」

「とにかくこれを処理するためには食べるしかない。ほら」「」

フランスパンも用意したから、せや、がぶつとどうぞ」

「なんで私が食べるのよー？ 出水とかに突っ込んでおきなセコよ

つー！」

「さすがに今の彼には酷だし、それにこのパンは部費じゃなくて私のね「」りだし」

「「」の際どっちでもいいわア！！ わつ、ほんとこ、ほんとこ止めて？ ナチュラルに盛らなこでよおおおおーー。」

こみみは片手で箸を使い、器皿に「」シンをフランスパンに高々と盛り、薄切りにされたパンを押しつぶすようにして重ねる。そして出来上がったサンドイッチをおもむろに掴むと、じつちを睨んでいやつとひと笑み。

「「」りやああーー！」

「「」こいあつううむぐつー？ ぐ……ぐ……？」

柔らかめのフランスパンから飛び出す柔らかな物体。皿の上に躍り出た瞬間も激しい匂いを放ちづける……がしかし、

「もぐ……もう……？」

いや……ちょっと塩辛いだけで、別に不味くはない。むしろイケる。

「「」りだこずりちゃん」

「…………」

ただ、絶対に認めたくない。こんなのがおいしいだなんて。

翌日、仕切り直しと云つ事で再び部員に召集が掛けられた。私は田直であるひこつを置いて先に部室に入ると、既に出水が椅子に座っていた。

「よつすずつちゃん」

「あんた……昨日意識不明の重体で運び出されたんじや……」

「んー？ そうだけ？ にしてモノの部室すぐ良い匂いだよな」

……は？

「だつてこれでもかつてくらいによつすずつちゃんの匂いが染みついてるんだよ。もう我慢できなくて4時間田からずつとこに居るんだよ」

それつてしまり、私の匂いが = 一シン …… って事？

「お、ビウしたのよつすずつちゃん」

もう、本当にお嫁に行けない……。

## 五木 一枝の兄貴

異臭騒ぎは収まった。責任は、俺が取った。

反省文を書いた。

……今はもう、何も思い出したくない。

設立から4年目、我が本部は物語高校で有名な部活となつた。臭いで。

おかげでこんな部屋を欲しがる生徒はいなくなり、こみみの口車によつて「私たちはこんな事する程に本気だ」という話が教員たちに広まつたらしい。おそらく大半は呆れて匙を投げてしまつたのだろうか。とにかく俺たちは、無駄に平穏な放課後を手に入れてしまつた。

「さて気を取り直して……今日から本格的に活動するから覚悟してよね、特に出水！」

同じように俺こと出水と、一枝、ちこり、美靴が向かい合つよう椅子に座り、こみみはセンターの位置で小さい身体を囁いてぱい動かし声を上げる。

「まだ俺はラノベ書く事に納得していないけど」

「……私も……」

「ふん？ 何か言つたちこりん？」

「ええいや、なんでもないよ……」

ちこりが小さくつぶやいた言葉は、どうやら隣にいた俺にしか聞こえなかつたらしい。彼女が妙にラノベを毛嫌いする事は以前の騒ぎで露見したが、その理由は一切明かされてない上に誰も聞こうとしない。俺が聞かない理由と大体同じだらう。聞いたつて別に意味はないからだ。

「みくちゃんは我が本部の名誉雑用係」

「はいー」

「ちこりんとずつちゃんは2視点から評価を下す名読者。で、こみみは影から大地を揺るがすムーブメントを作る大編集者。そうしたら後は出水が書くしかないでしょ？」

「俺に選択肢はないのかよ！……いやとにかく、そこまで俺に書かせようとするのなら、それなりのサポートなりなんなりはしてくれるんだろう？」

とは言つてみたものの、俺は若干乗り気だった。この機会にラノベを書くのも悪くない。

「もちろん、こみみの仕事そのものですぜ」

こみみは陽気に鼻歌を歌いながら部屋の隅に寄せてあつたキャリ一付きの黒板を引き、板面をこちらに開かれて見える場所に止めた。「さて、まず投稿するレベルを決めようではないか」

「は？ 普通こいつ……執筆理論とかそういうのから始めるんじゃないのかよこみみ？」

「ふふん出水、正直ラノベなんかどうって事ないってナメてる節あるでしょ？」

まあ大筋その通りだが

「人気が出るように書くのは乐じやないとは思うけど……確かに、俺が書いても大丈夫なんじゃないかって思う作品もなくはない」

「そーでしょーそーでしょー。だから今はそんな気持ちで、とりあえず説明を聞きなさいな」

「お、おう……」

「そだそだ。ずっちゃんもこっち来てよ」

「わわ、私も？ なんで」

「一部ならこみみより詳しく説明できるだらうからさ」

「そつ……じゃあ出来る範囲で良いなら」

そう言いながら一枝も席を立ち、2人は黒板の両側にそれぞれ立つて話しあ始めた。

「小説……とりわけラノベでも執筆そのものは大事。だけど昨今は書く事と同じくらい、レベル選びと書く題材選びが重要ななるの

です

「そんな固定的なものなのかな？」

少し投槍に訊ねてみると、こみみよりも先に一枝が腕を組んだ格好のまま答えた。

「最王手の『演劇文庫』ならともかく、他の各レベルに焦点を当てるなら題材は自ずと限定されしていくわ。例えば『<sup>もふもふ</sup>mfmf文庫』ならヒロイン描画に重きを置く事。『（げーあー）文庫』ならそれよりももう少し弾けた感じで……その、エロ要素とかがあると良いつて言われてる。あとその年に流行ったものにも影響されるかな。もちろん被らない方向でね。例外はどこにでもあるけど、実力が他人に認められない内はまず書く事だけ考えた方が適切よ」

一枝が語る一方で、こみみは黒板に挙げられたレベルの名前を書き並べる。俺と美靴はただ話を聞いてふんふんと頷いていたが、終始ちこりは不機嫌そうな顔のまま机の上をじっと眺めているようだった。

「……で、大体こんな感じに審査がされて、賞を与えられたのちプロになつてくのがおおよそのところ。分かつた出水？」

その後、こみみの割と真面目な話が10分ほど続いた。各レベルの細やかな説明から、ヒットする作品の題材、王道とありきたりの違いなど、思いのほか聴衆にも気力を求めるような深い内容だった。最初は面を食らつたような気分ではあつたが、時間と共に俺はただ話に聞き入っていた。

……それが何故お馬さん江戸に発展しているかの意味が解らない！

「江戸いう事だよ出水！」

「説明つてのは分かるように話すことだらうが！」

「いいかい馬！今は演劇の独壇場と言つても過言ではないのだよ。各レベルはそれぞれの特色を出すくらいでしか対抗できないくらいに規模が違うし、澄川系列以外で対抗できるのはたぶんmfmf

文庫くらいなのー。お姉ちゃんだつてがんばつてのーーー。」

「あうえつと……」

「「？」

急に変な声を漏らしたちこりで全員の視線が集まる。

「どしたちこり?」

俺が訊ねると、彼女は少し口をすぼませてから小さく  
「ちょっと……今日家の用事があるから、帰つても良い……?」

「おー。用事あるならしょうがないよ。いってらーつしゃーい」  
わざとなのか、人の表情をまったく伺おうとしないこみみは真っ  
直ぐ元気な声で彼女に返事し、そして送り出す。鞄を持ったちこり  
は小走りに戸の方へと移動してから振り返る。  
「えと……その、いつきます」

会議はしばらくなかった。というか、机を  
壁際に寄せた時点で続行なんか無理だつたんだ。こみみは俺を馬に  
したまま動かないし、何を思ったのか美靴まで乗つかり始めようと  
する。そんな所を見て呆れたのか、一枝は鞄を持って部室の戸を開  
いた。

俺は乗つかつてきた2人を勢いで無理矢理剥がして彼女を追い、  
そしてこの校門外に至る。

「なんであんたが付いて来るわけ?」

「んや……そうでもしないとあの状況から抜け出せられなかつたし」

「あら、女の子に馬乗りにされて喜んでるものとばかり」

「俺にどういうキャラを付けたいんだよー……」

駅までの短い距離を、自然にふたり並んで歩く。

「ねえ、あんた本当に書く氣あるの?」

ポニー テールを横に振つて、一枝が一瞥しつつ俺に訊ねる。その  
瞬間、ふわりと風にあおられたシユールストレミング とは違つ  
彼女本来の香りが鼻をくすぐつた。

「え、あ……まあ、やらなによつはやつてみようかな程度には思つてるよ。それに本氣でがんばつてこみみを裏切りたくないし、ちこだつてみくとの仲を……」

「でもちこ本人は途中で帰つちやつたんだよ？ みんなを置いてやつぱり前の騒ぎも踏まえないと……ラノベを作つて事自体に消極的なんだと思つよ」

「ずつちゃんは興味なさげなのに、割とノリノリだったな」

「私はその、えと……」

会話に割り込むよじにして、白い車がクラクションを鳴らして歩道へ寄せてきた。まず一枝が足を止めるが、俺もつられるようにして歩を止める。すぐに車の窓が開かれると、中から茶髪の男性が顔を出してきた。

「一枝ー学校終わつたのか？」

「わざとらし……兄貴、ずっと私が校門出るまで待つてたつての？」

「仕事サボんな」

「サボつてないよお、今日はずつと原稿読んでたし」

その呼び方から、彼は一枝の兄であると言つのはすぐ分かつた……が、見た目はかなり年が離れているように見えるせいで、まだ少し疑わしい。こんなに濃い目のクマは初めて見た。

「んで……そこにいる君は誰なんだい？」

ついに茶髪の男性が俺に話しかけてきた。変に隠してもしょうがないので手短に答える。

「ずつち……いや、こほん。一枝さんと同学年の常葉 出水です」

「何で一緒に帰つてるのかな」

「同じ部の部員なん……重なつただけです」

「ほう、それじゃあ」

なんで事情聴取みたいになつてるんだ？ なんだか穏やかな感じがしない。

「つたぐバカ兄貴、こんな所に停めてたら他に迷惑でしょうが。で、迎えに来てくれたのか冷やかしに来たのか、はつきりしてよね」

「あはは、そうだつたな。夜の会議まで時間があるから家に帰るつもりだつたんだよ。せつかくだから2人とも乗つて乗つて」

言われるまま後部座席に乗る。一枝は助手席に鞄を放り投げると、俺の隣に来るよう後に後部座席へ座つた。

「常葉くん、君の家はどの辺なんかい？」

「あつちの駅方面にまつすぐ……自宅まで遠回りになるよひだつた降りますよ？」

「いやいや遠慮しないで、いろいろ聞きたい事があるんだから」と、いかにも「他意はないよ」と言わんばかりの笑顔で言うものだから余計に怖い。一枝の兄ならもう少し生真面目な人かと思つていたのにこれだ。

「そうだ、すっかり自己紹介するのを忘れていたよ。俺は五木馬。<sup>ま</sup>妹の一枝がお世話になつてます」

「いいえ、こちらこそ……」

……この場で一枝が否定せず黙つているから、兄妹なのは本当なんだろう。でもいい加減この空気感だけは何とかして欲しい。緊張とも倦怠ともつかぬ不安定な……。

「ところで常葉くん。一体何の部活をやつてるんだい？」

「ちょっとバカ兄貴！ そういう事聞くの止めてつて言つたでしょ！」

「今は常葉くんに聞いてるからね～」

一枝は兄 五木さんに何も話していないのか。彼女がわざとそうしているなら言わないで置く方が気が利いてる……だけど、今は反応が読めない五木さんの方が怖い。

「ぶ、部活の名前は本部つて言つんですけど、実際はライトノベルを考えたり書いたりする部なんです。まだ駆け出しつて程にも活動は進んでいないけど……」

「へえーラノベ作りかあ。いいね、そういうの」

思つたよりもずっと軽い反応。てつきりラノベなんてオタクくさいものを作るのに、うちの妹を巻き込みやがって！ と言いながら

シガーソケットを押し当てるのかとばかり。

「五木さんも小説とか ラノベとか読んだりするんですか?」

「まあね。でも俺は面白いものだつたらなんでも吸収したいからね。

選り好みはしないよ」

学校の前を出て数分。最初はこのように自然な会話が流れていたが、次第に言葉は連続性のないキャツチボールになり、家に着く直前にはまったくの無言状態になってしまった。

「この辺で良いかな?」

「ええ、俺ん家すぐそこにあるんで」

車が止まると、氣まずさから逃れようとすぐにドアを開き、鞄を持つて車を降りる。

空は綺麗な夕焼けに染まっていた。いつもはもっと早く帰つてきているだけに、路上から見るこの色彩は俺の目に新しく映つた。……と外の空気を満喫する前に、一晩くらい挨拶しないと後味が悪い。

「わざわざ送つてもらひつてありがとうございました」

「いやいや、我が妹の大変な友達だから遠慮はいらなによ

「いえいえ……では、これで」

「ちょっと待つて常葉くん」

適当な区切りと思つたタイミングを、彼は綺麗に吹き飛ばしてくれた。ここまで来ると少しイラつとすら来る。

「なん……ですか?」

何を追撃するように聞かれるのかと恐れながら振り返ると

「君が本部でライトノベルを書く人になつてるんだよね?」

「え、なんでその事を……本部の部員以外は知らないはずなのに」

「昨日一枝が言つて来たんだよ。友達の男子が賞を手指してライトノベルを書く事になつたから、そのアドバイスとか出来ないのかつてね」

「友達……ずっとやん?」

立ち姿勢から少し腰を落として後部座席の一枝を覗くと、クッと

目を見開いている彼女の姿が目に入った。

「は、ば、バカ何直接言つてんのよ！ あほ、ナス！！」

「別に他言禁止とは言われてないし？ 僕は単純に、その男子って  
いつのが彼だと推理しただけなんだけどなあ」

「ほんとにムカつくクソ兄貴…… こら出水！ いつまでそこに突っ  
立つてゐるつもり！？」

「お、おう」

言われてみれば確かに路上の真ん中に立つたままだ。車の通りが  
少ないとはいえ、いつまでもここに居る訳にはいかない。

「ま、そういう事だよ常葉くん。とりあえず自分の力でがんばって  
みなよ」

「そうですか…… わかりました」

「それじゃ、今後もよろしくね」

そこで五木さんは窓を閉じ、僕が家の前まで歩くのを見送つてか  
ら車を出した。

俺が何となく車の走り去る姿を眺めていたら、100メートル程  
先に行つた場所で変なクラクションを鳴らし始めた。…… 中でどん  
な乱闘が起きてゐるのか、想像は出来ない。

「つまらん。お前の話はつまらん」

「そういうネタはいいから真面目に答えてくれ」みみ

「本当につまらない」

「……え？」

ちょうど雨の日のことでした。わたしは「パンジー」された30枚の原稿を手に持ちながら眉をひそめていると、こみちゃんが威圧するような大声でそう言つたのです。

「なあちこ、お前は全部読んだか？」

出水くんは糸田をいつもより細めて訊ねて来ます。わたしは田のサインで「まだ読み切つていない」と答えると、再び彼はこみちゃんの方を向きました。

「いや、あのせ、全部読んだ本当に？」

1ページ田に書かれたタイトルは『雨傘』、その下には作者の名前として常葉 出水と書かれています。彼は自宅のパソコンで文章を打ち込み、原稿を3日で完成させたらしいのです。

「当たり前でしょ？ ちゃんと批判するなら、批判する人間も責任は持つものよ」

こみちゃんは原稿をぽんと机の上に置く。そして腕を組んでからため息をつくと、横田で一枝ちゃんと問い合わせました。

「出水はこみみの事どうしても信じてくれないみたいだよずっとちやん」

「だつてみくは面白いって言つてくれたんだぞ？」

出水くんは必死に自分を弁護する。最初はなかなか自信満々に原稿を出した上、一番最初に読み切つたみくちゃんは確かに面白いと笑顔で言つていた。

……だけどその期待が余計に、この落胆を大きくしている気がしてなりません。

「うーん……つまらないってのはもう」みみが言つてるから良いん  
だけど

「ずっとちやんまで前提かよ!」

「短編にしたつて期待を下回り過ぎよ。主人公が目覚めると隣に女  
の子がいた。もうこの時点で読み止めていいなら止めてるよ」

「な、何でだよ……」

「これは執筆や構成よりも心理現象なんだけど……朝主人公が目覚  
める所から始まる小説つて、内容そのものが作者の願望になつて  
る。詳しい内容は省くけど、大体その系統の話つてよほど人生経験  
がある作者じゃないと、妄想にまみれた面白くもない私小説にしか  
なんない」

「うーん……これが出水くんの願望なのかは知らないけど……主人  
公が朝目覚めると、同じベットに女の子が寝ていた。その女の子は  
今日から家に住む同居人だけど、伯父さんがそのことを主人公に話  
さず勝手に決めた……つて所から物語が始まつてます。

「……解つた、とりあえず面白くはないのは認める。でもどうつま  
らないんだよ」

さすがに少しいじけたような声色で出水くんが訊ねると、こみち  
やんはもう一度原稿を手に取つてからパラパラ捲りつつ語り始めま  
した。

「まー導入はともかくね……一緒に住むことになつた女の子と中学  
校へ登校すると、親友の大和くんとその友達である茅野原ちやんに  
会う。こつからのストーリーがめちゃくちゃよ」

「ど、どう滅茶苦茶なんだよ」

「聞いてばっかりも良くないと思つよこみみは? んーとね……部  
活動同士がある条件で強く対抗していふつてのは良い素材だとは思  
うけどや、なんで天文部の活動と軽音部の活動を一緒にたに扱つて  
るの? どっちを描きたいの? どっちを推したいの?」

「いや……どっちも……」

「そのどっちつかずが読者にとってストレスなの。しかもストーリ

ーのオチが意味不明。実は最初にベッドへ入ってきた子は双子の妹で、最初から主人公を兄だと知つて生活していた？んで倒れた母親が病床から回復したから主人公に黙つて帰るけど、そこで主人公が真実を知つて駅で引き止める、妹はそこで主人公に抱きついて謝る。読者ナメてるの？」

「いやそこはさ、駅のホームにある駅員用のマイクを使って引き止めるのがポイントで」

「あのねえ……そういうアクションを本位でやるならそれに向かつて、状況や人間関係を本位でやるならそれに向かつて、って焦点を合わせないと一貫性が出ないの。解る？」

「……ああ、何となく……」

次第に可哀そなほどに声の威勢が無くなつていく出水くん。こみちゃんの説教が終わるタイミングで読み終わつたわたしも、彼女の言葉とほぼ相違ない感想です。

「……で、でも、すごいと思います！」

彼の落ち込みで空気感まで沈んでしまつた中、原稿を両手で持つたままのみくちゃんは顔を上げて言いました。

「確かにみんなにはウケなかつたかもしれないけど、たつた3日でこれだけの量を書けるつてだけでも凄いんじゃないかなっ？」

「み、みく……！」

少し元気を取り戻した出水くんを浮かせまいと、一枝ちゃんはすかさずつっこみます。

「まー……確かに比較的には速い方かもね。でもクオリティが追いで付いてなければ意味ない」「はあ……」

「でも、武器にはなり得るかもね」

「え？」

「大概の人間は書き切る前に挫折するの。あれがダメだこれがダメだつて言うループに入り込んで、苦しみの原因が分からないとついに投げ出しちゃうの。その点あなたはここまで書き切つた、付いてないけどオチは付けた。花は咲かなかつたけど、種を植えて葉っぱ

を生やすまでは出来たって事。だから無駄に落ち込む事はないわ」「そうなかつ！？」

「でも今後の課題は、今積もりに積もってる勘違いをいかに経験量で変えていくか、だね。凡人の凡人による地道な努力ってやつよ」「えー……褒めてくれたってのにそれかよ」

「「褒めてないよっ！！！」」

こみちゃんと一枝ちゃんはほぼ同時に彼に向かい言いつけました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2682z/>

---

クーゲルシュライバー！

2012年1月13日22時50分発行